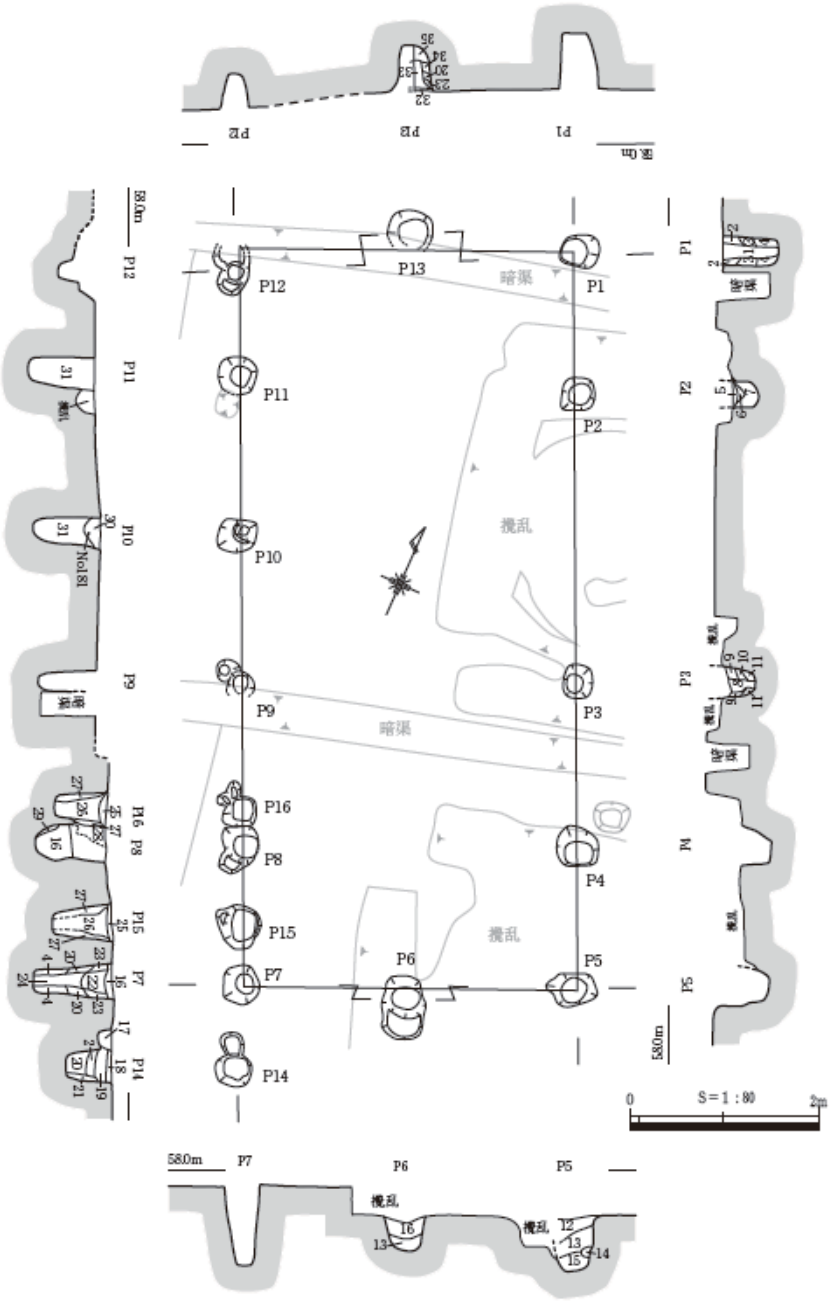
３　掘立柱建物跡

SB１（第59・60図、表11、PL.24・53）

１区北西端のＢ７・Ｃ６・Ｃ７グリッドにあり、標高58.0m付近の上部平坦面に位置する。梨畑に土地利用された際に大きく削平を受けており、表土直下のソフトローム層で検出した。また、建物跡の北端と中央付近では、いずれもほぼ東西方向に暗渠が設けられていたほか、建物跡の範囲内は梨畑利用の際に大きく攪乱を受けていた。そのため、建物跡の北西隅の柱穴と、建物東側の柱穴列のうち北側から３番目の柱穴は検出できなかった。

桁行５間（約7.8m）、梁行２間（3.4～3.5m）に復元できる掘立柱建物跡で、平面形は北西－南東方向に長い長方形を呈する。主軸はＮ－25°－Ｗで、平面積は26.8㎡と大型である。また、梁の中央に当たるＰ６とＰ13が、いずれも短辺の軸線上より外側にずれることから、近接棟持柱をもつ建物であると考えられる。

柱穴の規模は、径30～40cm、深さは60～80cm程度である。Ｐ14～Ｐ16は、長辺の軸線上にあるものの、対応する柱穴が確認されていないが、Ｐ16とＰ８がＰ８→Ｐ16の順で重複する点、これらの柱穴に対応して他の建物を構成するような柱穴が周辺で確認できない点からみて、建て替えまたは補修等の際に掘削されるなど、本建物跡とかか



1　黒褐色土（10YR2/2）　φ1cm以上のローム粒をわずかに含む
2　黒褐色土（7.5YR3/2）
3　黒褐色土（10YR3/2）　ローム細粒をわずかに含む
4　灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム細流をわずかに含む
5　黒色土（7.5YR2/1）　φ1mm以下の白色砂粒を少量含む
6　黒褐色土（10YR2/2）　φ1mm以下の白色砂粒を少量含む
7　黒褐色土（10YR3/2）　φ1mm以下の白色砂粒とローム細粒を少量含む
8　黒褐色土（10YR3/2）　φ1mm程のローム細粒を含む
9　黒褐色土（7.5YR2/2）　φ1mm程のローム細粒を含む
10　黒褐色土（7.5YR3/2）　φ1mm程のローム細粒を含む
11　黒褐色土（7.5YR3/2）と明黄褐色土（10YR6/8）の混淆土
12　褐灰色土（10YR4/1）　φ3～10mmのロームブロックを多く含む
13　黒褐色土（10YR3/1）　φ3～10mmのロームブロックを含む
14　黒褐色土（10YR2/2）
15　黒褐色土（10YR2/3）とにぶい黄褐色土（10YR5/3）の混淆土
16　黒褐色土（10YR2/2）　ローム細粒をわずかに含む
17　黒色土（7.5YR2/1）
18　暗褐色土（7.5YR3/3）　ローム粒を含む
19　褐色土（7.5YR4/3）　ローム粒を含む
20　黒褐色土（7.5YR3/1）
21　暗褐色土（10YR3/3）
22　黒色土（10YR2/1）　ローム粒・ブロックを含む
23　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒を含む
24　黒色土（10YR2/1）　ローム粒・ブロックを少量含む
25　黒褐色土（10YR2/2）　粘性なし
26　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を少量含む
27　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を含む
28　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒を多く含む
29　黒褐色土（10YR2/2）と明黄褐色土（10YR6/8）の混淆土
30　黒色土（10YR1.7/1）　φ1～5mmのロームブロックを含む
31　黒色土（10YR1.7/1）　φ1～15mmのロームブロックを多く含む
32　褐暗褐色土（7.5YR2/3）
33　黒褐色土（10YR2/2）　φ2mm大のローム細粒を含む
34　暗褐色土（10YR3/3）　φ2～4mm程のローム細流を多く含む
35　暗褐色土（10YR3/2）　φ5mm程のローム粒を多く含む

第59図　SB１

わるものである可能性が考えられる。P14～P16を除く柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間が1.5mで、以下Ｐ３－Ｐ４間からP13－Ｐ１間まで時計周りの順に1.8m、1.4m、1.8m、1.7m、1.5m、1.7m、1.6m、1.6m、1.4m、1.8m、1.7mとなる。

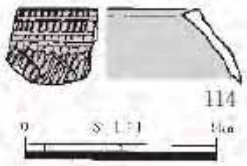
柱穴の埋土は、いずれも黒褐色土を主体としており、ローム粒やロームブロックを含む。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ７・P13では、柱痕跡を確認し、そのうち残存状況の良好なＰ１から推定できる柱の直径は12cmである。

遺物は、Ｐ２・Ｐ８～P10・P15の埋土中から弥生土器が出土しているが、小片のため図化できたのは１点のみであった。114は、Ｐ８の埋土中から出土した無頸壺口縁部片である。

表11　SB１ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	43×35－59	柱痕跡有(径13cm)
Ｐ２	36×35－28	
Ｐ３	37×32－35	柱痕跡有(径13cm)
Ｐ４	46×44－32	
Ｐ５	54×35－58	
Ｐ６	68×46－37	
Ｐ７	43×39－85	柱痕跡有(径23cm)
Ｐ８	48×39－75	
Ｐ９	30×22－62	
P10	42×36－72	
P11	42×41－72	
P12	44×39－38	
P13	49×34－49	柱痕跡有(径不明)
P14	40×36－49	柱痕跡有(径24cm)
P15	48×47－63	柱痕跡有(径22cm)
P16	37×32－56	柱痕跡有(径23cm)

出土土器は清水編年Ⅳ－１様式に相当することから、本遺構の時期は弥生時代中期後葉ごろと考えられる。



第60図　SB1出土遺物

SB２(第61・62図、表12、PL24・.25・83)

４区南東側のＦ16グリッドにあり、標高50.3m付近の下部平坦面に立地する。表土以下はホーキ層となっており、クロボク層からソフトローム層は、後世の開墾で削平されていた。周辺は、耕作のトレンチャーによる掘削が著しい。SB３・４と重複しており、柱穴の切り合い関係は不明であるが、形態的にSB４はSB２にやや先行するものと考えられる。ほぼ同規模のSB３との関連性が高いが、SB２との前後関係は不明である。

桁行３間(6.4～6.5m)、梁行１間(2.6～2.8m)の掘立柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。主軸はN－4°－W、平面積は約17.4㎡である。柱穴の規模は径0.3～0.8m、深さ0.32～0.67mで、Ｐ６は２基重複している。柱間距離はＰ１－Ｐ２間から順に2.2m、2.1m、2.1m、2.8m、2.3m、2.1m、2.1m、2.6mを測る。

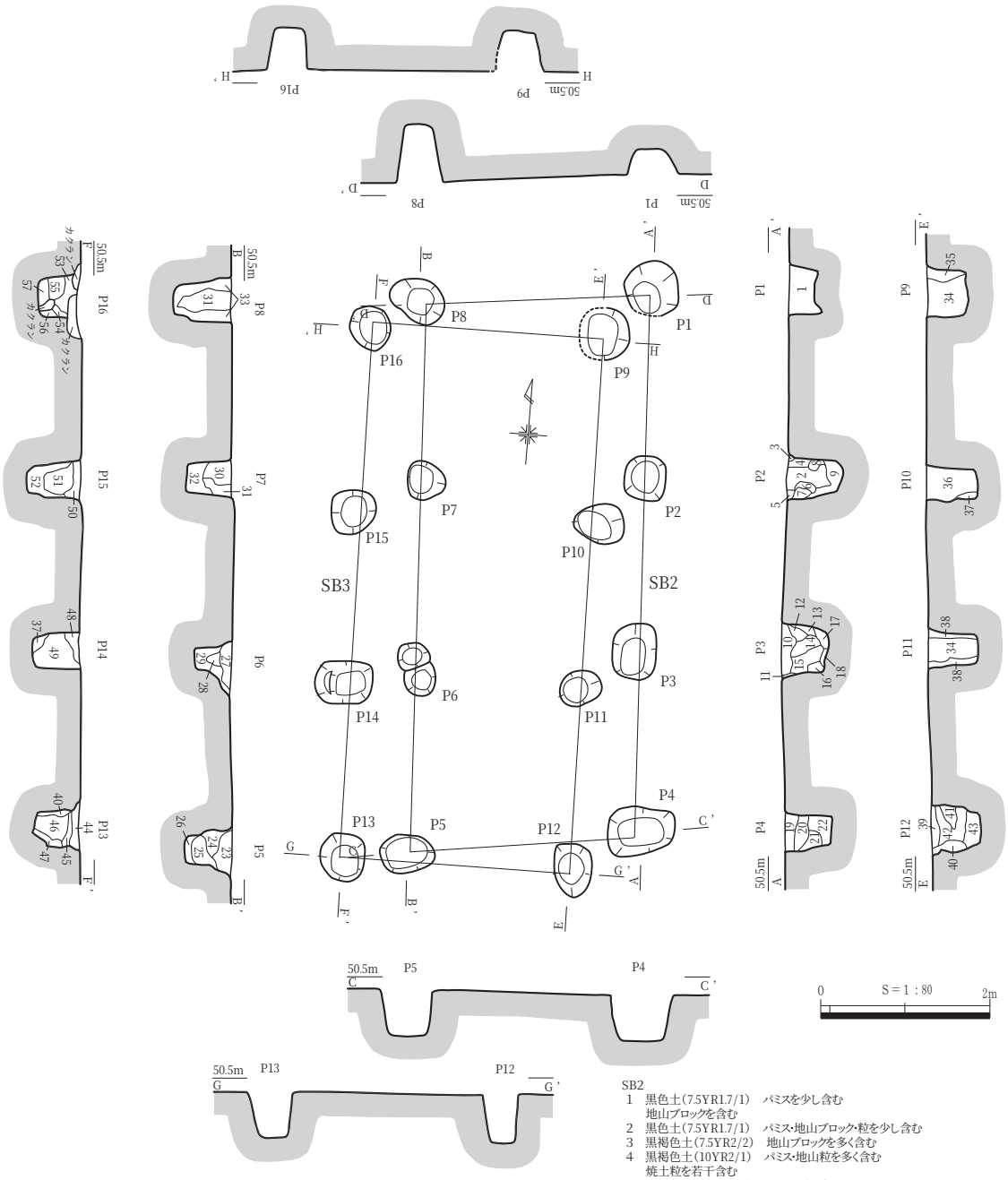
Ｐ２・８で柱痕跡を確認し、そこから推定できる柱の直径はそれぞれ26cm、20cmである。

Ｐ５埋土中から出土した小型扁平片刃石斧Ｓ42を図化した。その他柱穴の埋土中からも弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

重複するSB３が清水編年Ⅳ－２・３様式、弥生時代中期後葉と考えられることから、SB２もほぼ同時期のものと考えられる。

表12　SB２ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１X	64×63－55	
Ｐ２	52×48－65	柱痕跡有(径26cm)
Ｐ３	56×50－47	
Ｐ４	80×50－56	
Ｐ５	65×44－32	
Ｐ６	38×30－48	
Ｐ６－２	38×35※－53	
Ｐ７	48×45－61	
Ｐ８	65×48－67	柱痕跡有(径20cm)



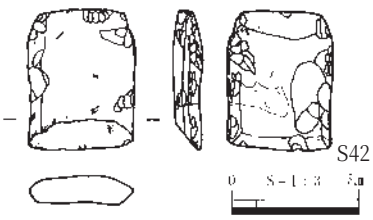
SB3
34　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを少し含む
35　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミスを少し含む
36　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミス・地山粒を多く含む
37　黒褐色土(10YR3/1)
38　黒色土(10YR2/1)　地山粒がかなり多く含む。地山ブロックを少し含む
39　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミスを少し含む
40　黒褐色土(10YR3/1)　地山粒を多く含む
41　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒を少し含む
42　黒色土(7.5YR2/2)　パミス・地山粒を少し含む
43　黒色土(7.5YR1.7/1)
44　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒子を多く含む
45　黒褐色土(7.5YR2/2)と地山粒子の混在土
46　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミスと地山粒を若干含む
47　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・粒子を多量に含む
48　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミス・地山ブロックを少し含む。地山粒を多く含む
49　黒色土(10YR2/1)　パミス・1～4cmの地山ブロックを少し含む。地山粒を多く含む
50　黒褐色土(5YR2/1)　2～3cmの地山ブロックを少し含む。パミスを若干含む
51　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山ブロックを少し含む。パミスを若干含む
52　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを若干含む
53　黒色土(10YR2/1)　パミス・地山粒を少し含む
54　黒褐色土(10YR2/2)　7cmの地山ブロックを含む
55　黒色土(7.5YR2/1)　地山粒を多く含む。パミスを少し含む
56　黒褐色土(10YR2/3)　パミスを若干含む
57　黒色土(7.5YR3/1)

SB2
1　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミスを少し含む
地山ブロックを含む
2　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミス・地山ブロック・粒を少し含む
3　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山ブロックを多く含む
4　黒褐色土(10YR2/1)　パミス・地山粒を多く含む
焼土粒を若干含む
5　黒褐色土(10YR2/2)　パミスを多く含む
6　黒褐色土(10YR3/1)　パミス・地山粒・焼土粒を若干含む
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　パミス・焼土粒を若干含む
8　黒色土(10YR1.7/1)　地山粒子をかなり多く含む。
地山ブロックを含む
9　黒褐色土(10YR3/1)　パミス・地山粒を若干含む
10　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒子を多く含む。地山粒・ブロックを少し含む
11　黒褐色土(7.5YR3/1)と地山粒子の混在土
12　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミス・地山粒を若干含む
13　黒褐色土(10YR2/1)　地山粒子を少し含む
14　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山ブロックを若干含む。パミス・地山粒を少し含む
15　黒色土(7.5YR2/1)　地山粒を少し含む
16　黒褐色土(10YR3/1)　地山粒を多く含む。地山ブロックを少し含む
17　黒褐色土(10YR3/1)と地山ブロックの混在土
18　黒色土(10YR1.7/1)　地山ブロックを少し含む
19　黒色土(7.5YR1.7/1)　1～3cmの地山ブロックを少し含む。パミスを若干含む。
地山粒子を多く含む
20　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミス・地山粒を少し含む
21　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒子をかなり多く含む
22　黒褐色土(10YR3/1)　地山粒子を多く含む。地山ブロックを少し含む
23　黒色土(10YR1.7/1)　パミスを少し含む。地山粒を少し含む
24　黒褐色土(10YR3/1)　パミスを若干含む。2～8cmの地山ブロックを含む
25　黒褐色土(7.5YR3/1)に地山粒子が混在。2～4cmの地山ブロックを多く含む
26　黒褐色土(10YR3/1)　地山ブロックを少し含む
27　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミスを若干含む
28　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロックを多量に含む。パミスを若干含む
29　黒褐色土(7.5YR2/1)　地山ブロックを含む
30　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミスを少し含む。地山ブロックを少し含む
31　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを若干含む
32　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを少し含む。地山ブロックを若干含む
31　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを若干含む
33　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミスを若干含む

第61図　SB２・３

SB３（第62・63図、表13、PL.24・25・53）

４区南東側のＦ16グリッドにあり、標高50.3m付近の下部平坦面に立地する。表土以下はホーキ層となっており、クロボク層からソフトローム層は、後世の開墾で削平されていた。周辺は、耕作のトレンチャーによる掘削が著しい。SB２・４と重複しており、柱穴の切り合い関係は不明であるが、SB４は出土遺物からやや先行するものと考えられる。ほぼ同規模のSB２との関連性が高いが、前後関係は不明である。



第62図　SB２出土遺物

桁行３間（6.3m）、梁行１間（2.7m）の掘立柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。主軸はN－１°－W、平面積は約17.0㎡である。柱穴の規模は径0.39～0.6m、深さ0.48～0.69mである。柱間距離はＰ９－Ｐ10間から順に2.3m、2.0m、2.0m、2.7m、2.1m、2.0m、2.2m、2.7mを測る。

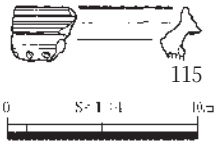
表13　SB３ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ９	60×53※－52	
Ｐ10	56×49－59	
Ｐ11	49×39－59	柱痕跡有（径22cm）
Ｐ12	66×49－54	
Ｐ13	57×53－56	
Ｐ14	66×50－57	
Ｐ15	53×52－69	
Ｐ16	53×46－48	

Ｐ11で柱痕跡を確認し、そこから推定できる柱の直径は22cmである。

Ｐ12埋土中から弥生土器甕115が出土している。その他柱穴からも弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

出土遺物から、本遺構の時期は清水編年Ⅳ－２・３様式、弥生時代中期後葉ごろと考えられる。



第63図　SB３出土遺物

SB４（第64図、表14、PL.24・25）

４区南東側のＥ16・Ｆ16グリッドにあり、標高50.4m付近の下部平坦面に立地する。表土以下はホーキ層となっており、クロボク層からソフトローム層は、後世の開墾で削平されていた。周辺は、耕作のトレンチャーによる掘削が著しいため、一部の柱穴は検出できなかった。SB２・３と重複しており、柱穴の切り合い関係は不明であるが、出土遺物から見るとSB４がやや先行するものと考えられる。

一部消滅した柱穴があるが、復元すると桁行６間（9.3m）、梁行１間（3.6～3.8m）の掘立柱建物跡と推定でき、平面形は長方形を呈する。主軸はN－８°－W、平面積は約34.5㎡と大型である。柱穴の規模は、径0.25～0.53m、深さ0.18～0.51mで、SB２・３に比べて小さい。

柱間距離はＰ１－Ｐ２間から順に1.5m、1.5m、1.2m、1.7m、1.3m、Ｐ７－Ｐ８間から順に1.7m、1.6m、1.5m、1.5mを測る。

表14　SB４ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	44×36－37	
Ｐ２	36×27－25	
Ｐ３	45×40－22	
Ｐ４	39×32－34	
Ｐ５	35×20△－30	
Ｐ６	34×33－51	
Ｐ７	32×28－23	
Ｐ８	53×47－18	
Ｐ９	35×28－25	
Ｐ10	36×25－21	
Ｐ11	30×27－24	

Ｐ５で柱痕跡を確認し、そこから推定できる柱の直径は20cmである。

Ｐ４～Ｐ６・Ｐ10の埋土中から弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉ごろと考えられる。

SB5(第65・66図、表15、PL.25・53)

１区中央からやや北西寄りのＤ５グリッド北東隅で、わずかにＣ５グリッドにかかる、標高57.5～58.0m付近の上部平坦面に位置する。梨畑に利用された際、大きく削平を受けており、表土のすぐ下のソフトローム層で検出した。また、建物跡の南寄りでは、ほぼ東西方向に暗渠が設けられていたほか、建物跡南端の柱穴２基、およびその周囲は大きく攪乱を受けていた。

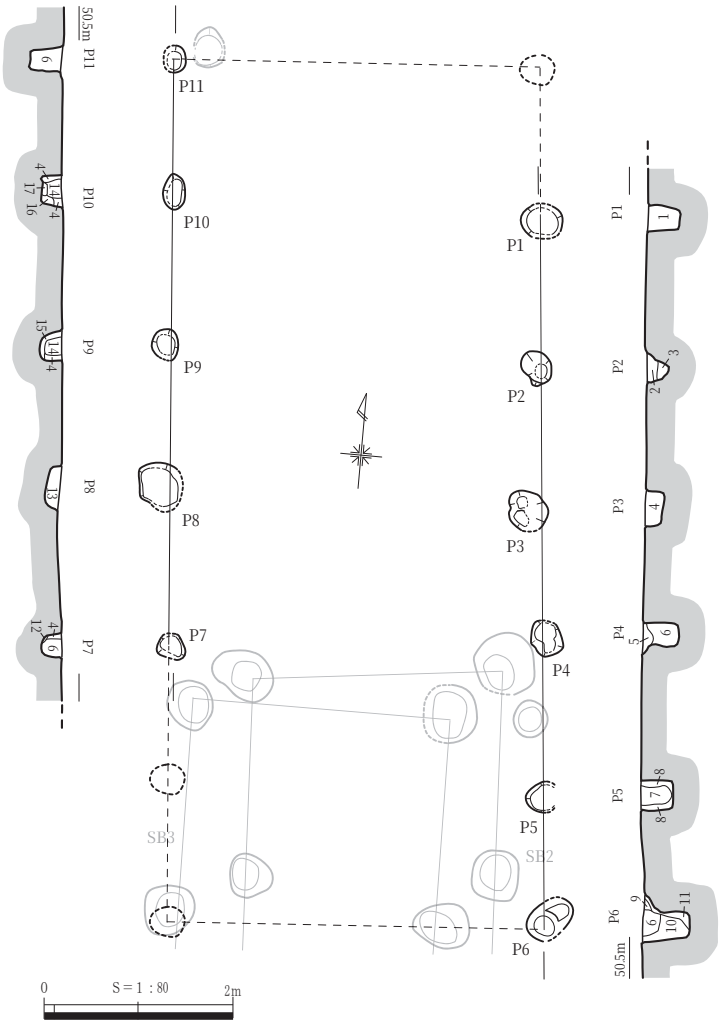
桁行２間(4.0～4.1m)、梁行１間(約2.2m)の掘立柱建物跡で、平面形は南北方向に長い長方形を呈する。主軸はN－６°－Wで、平面積は9.0㎡である。

柱穴の規模は、径20～40㎝、深さは30～40㎝程度である。Ｐ７とＰ８は、建物跡の軸線上にはなく、規模も小さいが、本建物跡とかかわる可能性もある。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から時計回りの順で、それぞれ2.1m、1.8m、2.2m、2.0m、2.1m、2.2mとなる。

埋土は、ほとんどの柱穴で黒褐色土と黄褐色ローム土の混淆土を主体としている。埋土から明瞭な柱痕跡は確認できなかった。

遺物は、Ｐ１とＰ５の埋土中から弥生土器が出土しているが、図化できたのは１点のみであった。116は、Ｐ１埋土から出土した壺または甕の底部片である。

底部片のみのため、詳細な時期は不明であるが、遺構の時期は弥生時代中期中葉から後葉(Ⅳ様式)と考えられる。



1　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミス粒を多く含む
2　黒褐色土(7.5YR3/1)
3　黒科色土(7.5YR2/2)
4　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミスを若干含む
5　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロックをかなり多く含む
6　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを少し含む
7　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミスを少し含む
8　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミスを少し含む
9　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミスを少し含む
10　黒褐色土(7.5YR2/2)　パミスを少し含む
11　黒褐色土(10YR2/2)　パミスを少し含む
12　黒褐色土(7.5YR3/1)と地山ブロックの混在土
13　黒色土(7.5YR2/1)　パミスを若干含む
14　黒色土(7.5YR1.7/1)　パミスを若干含む
15　黒褐色土(10YR2/2)
16　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山ブロックを少し含む
17　黒褐色土(7.5YR2/2)　パミスを若干含む
18　黒褐色土(7.5YR3/1)　地山ブロックを少し含む
19　黒褐色土(7.5YR3/1)　パミス･炭化物を若干含む

第64図　SB４

表15　SB５ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	43×39－30	
Ｐ２	38×36－40	柱痕跡有(径20㎝)
Ｐ３	31×29－29	
Ｐ４	38×32－39	
Ｐ５	47×42－35	
Ｐ６	28×25－39	
Ｐ７	29×27－20	
Ｐ８	28×27－32	

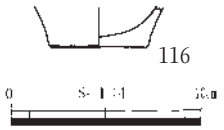
SB６（第67・68図、表16、PL.26・53）

１区南端のＧ３・Ｇ４グリッドにあり、標高58.5m付近の上部平坦面に位置する。梨畑に伴う造成のため、大きく削平を受けており、表土直下はソフトローム層もほとんど残らず、大部分が上のホーキ層となっていた。また、建物跡の西側の側柱列の真上を梨畑時の施肥溝が南北方向に掘削されているほか、建物跡のほぼ中央付近にも南北方向の溝があり、建物跡中央ではハードローム層に至るまで深く掘削されていた。さらに、建物跡の北寄りと南端付近に東西方向の暗渠が設けられており、建物跡の南側は一部調査区外となっていた。

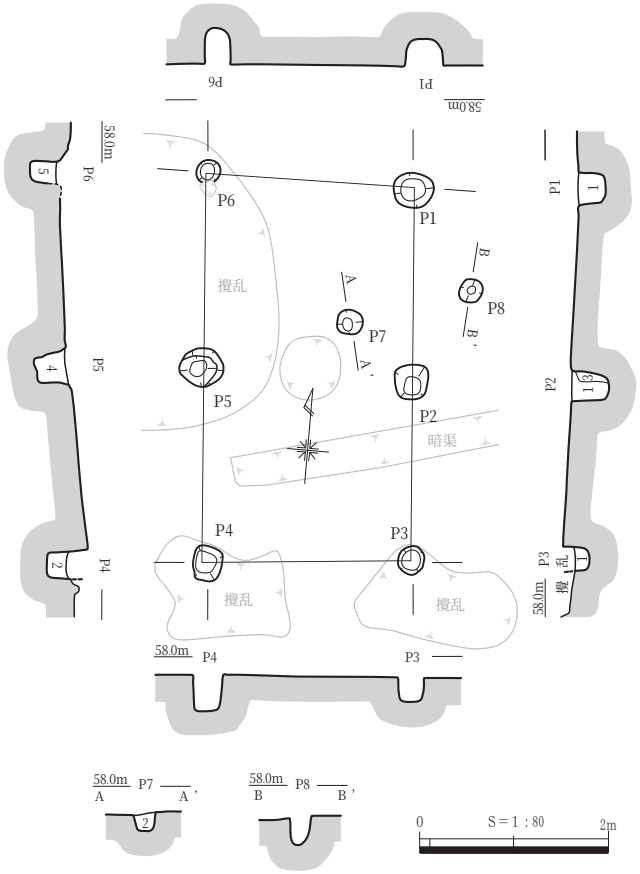
ほぼ南北に長い長方形を呈する掘立柱建物跡と考えられるが、先述のとおり、大部分が削平されていたため、正確な規模は不明である。短辺とのバランスからみて、長辺はＰ１からＰ６までである可能性があり、仮に建物跡の南限をＰ６とすると、桁行５間（8.3m）に復元できる。ただし、さらに南に建物跡が延長される可能性もある。また短辺は、長辺の柱穴間隔からみて、建物跡中央の南北溝による削平を受けた位置に柱穴が存在した可能性が高く、そうすると梁行２間（3.2m）に復元できる。主軸はＮ－20°－Ｗで、平面積は26.6㎡と大型建物に復元できる。

柱穴は、削平のため、本来の規模はわからないが、現状で径28～40㎝程度、深さは最も浅いＰ８とＰ11で20㎝前後、最も深いＰ５で55cmとなる。Ｐ10は、長辺の軸線上よりやや西にずれている。柱穴間距離は、Ｐ１からＰ６までの間が、それぞれ1.7m、1.7m、1.8m、1.6m、1.4mとなり、Ｐ７からＰ11までの間は、それぞれ1.6m、1.6m、1.7m、1.7mとなる。また、梁行の１間当たりは、約1.6mとなると推定される。

埋土は、黒褐色土または黒色土を主体とし、ロームブロッ



第65図　SB５出土遺物

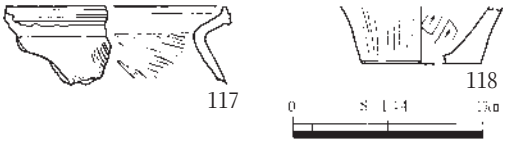


1　黒褐色土（7.5YR3/1）　ロームブロックを含む
2　黒褐色土（10YR3/1）と黄褐色土（10YR5/6）の混淆土
3　黒褐色土（7.5YR3/1）と明黄褐色土（10YR6/6）の混淆土
4　黒褐色土（10YR2/2）と黄褐色土（10YR5/6）の混淆土
5　黒色土（10YR2/1）　ロームブロックを含む

第66図　SB５

表16　SB６ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	34×31－33	
Ｐ２	37×33－38	
Ｐ３	37×36－43	
Ｐ４	36×35－27	
Ｐ５	41×38－55	
Ｐ６	34×31－51	
Ｐ７	36×30－30	
Ｐ８	32×29－19	
Ｐ９	41×33－39	
Ｐ10	35×35－32	
Ｐ11	34×31－21	



第67 図　SB6出土遺物

クまたはホーキブロックを含んでいる。埋土から、柱痕跡は確認できなかった。

遺物は、Ｐ３とＰ５の埋土中から弥生土器が出土している。117は甕の口縁部片、118は甕の底部片である。

出土土器から遺構の時期は、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉ごろと考えられる。

SB７（第69図、表17、PL.26）

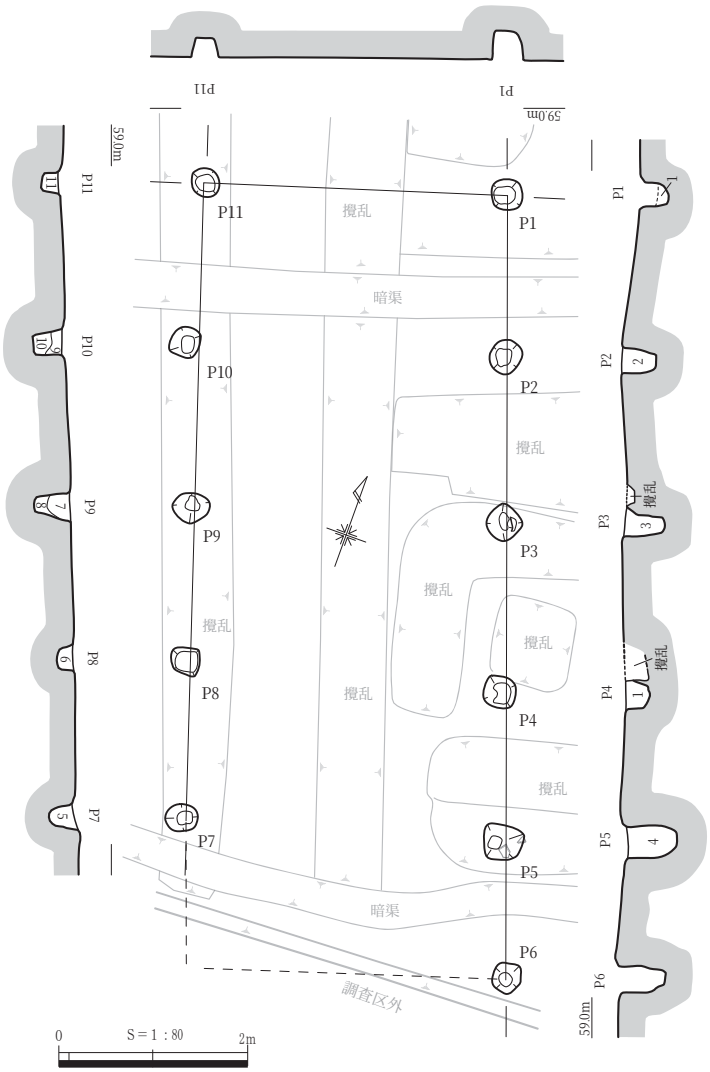
１区中央からやや南東寄りのＥ３グリッド南西隅にあり、標高57.5m～58.0m付近の上部平坦面に位置する。梨畑に伴う造成のため、大きく削平を受けており、表土直下はわずかにソフトローム層を残すのみで、大部分が上のホーキ層となっていた。桁行３間（4.2～4.5m）、梁行２間（約2.6m）の掘立柱建物跡で、平面形は、ほぼ南北方向に長い長方形を呈する。主軸はＮ－16°－Wで、平面積は11.4m²である。

柱穴は、削平のため、本来の規模はわからないが、現状での径は30～40cm程度、深さは5～20cm程度となる。Ｐ７は長辺の軸線上よりやや西にずれている。また、梁側のＰ５とＰ10もそれぞれ短辺の軸線上よりわずかに外側にずれた位置にあることから、近接棟持柱をもつ建物となる可能性がある。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から時計回りの順で、1.7m、1.3m、1.5m、1.3m、1.4m、1.2m、1.6m、1.5m、1.3m、1.2mとなる。

埋土は、黒褐色土または黒色土を主体とし、ロームブロックまたはホーキブロックを含んでいる。いずれの柱穴にも、柱痕跡は確認できなかった。

遺物は出土していないが、遺構の時期は弥生時代中期後葉と推定できる。

SB８（第70図、表18、PL.27）



1　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロックを多く含む
2　黒色土（10YR1.7/1）　φ2～3mmのロームブロックを多く含む。ホーキブロックを少し含む
3　黒色土（10YR2/1）　φ1mm～1cm大のロームブロックを多く含む
4　黒色土（10YR1.7/1）　φ1～2mm程度のロームブロックをやや密に含む
5　黒色土（10YR2/1）　φ2～3mmのロームブロックを多く含む
6　黒色土（10YR1.7/1）　φ1mm～1cmのロームブロックを密に含む
7　黒色土（10YR2/1）　φ1～2mmのロームブロックを少量含む
8　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック及びホーキブロックを密に含む
9　黒色土（10YR2/1）　φ1mm程度のロームブロックを多く含む
10　黒色土（10YR2/1）　φ1cm程度のロームブロックを多く含む
11　黒色土（10YR2/1）　φ1～2mmのロームブロックをやや密に含む。φ1cm程度のホーキブロックを少量含む

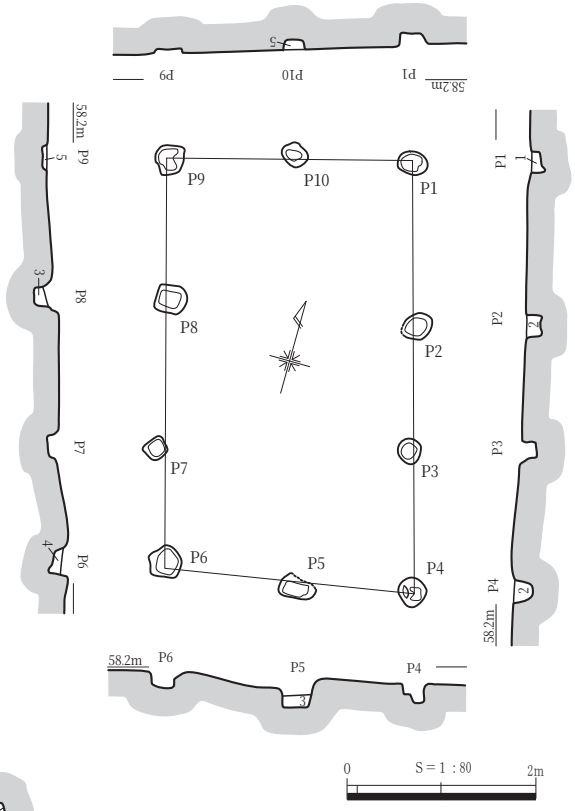
第68図　SB６

表17　SB７ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	33×26－14	
Ｐ２	35×28－17	
Ｐ３	29×26－18	
Ｐ４	33×31－21	
Ｐ５	40×27－28	
Ｐ６	36×34－19	
Ｐ７	24×22－12	
Ｐ８	34×31－24	
Ｐ９	34×31－6	
Ｐ10	30×26－12	

４区中央やや北寄りのＣ18・19、Ｄ18・19グリッドにあり、標高50.1m付近の下部平坦面に立地する。クロボク層（４－Ⅳ層）除去後のソフトローム層で検出した。SK19と重複しているが、切り合い関係からSK19に先行するものと考えられる。また、SX３・４によって一部削平されていることが判明した。

桁行２間（4.6 ～ 4.9m）、梁行２間（3.1 ～ 3.2m）の掘立柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。主軸はＮ－35 °－Ｗ、平面積は約14.8㎡と小型である。Ｐ２は柱筋から内側にずれている。柱穴の規模は、径0.3 ～ 0.69m、深さ0.23 ～ 0.67mである。Ｐ７・Ｐ８はそれぞれ掘り直しが認められた。



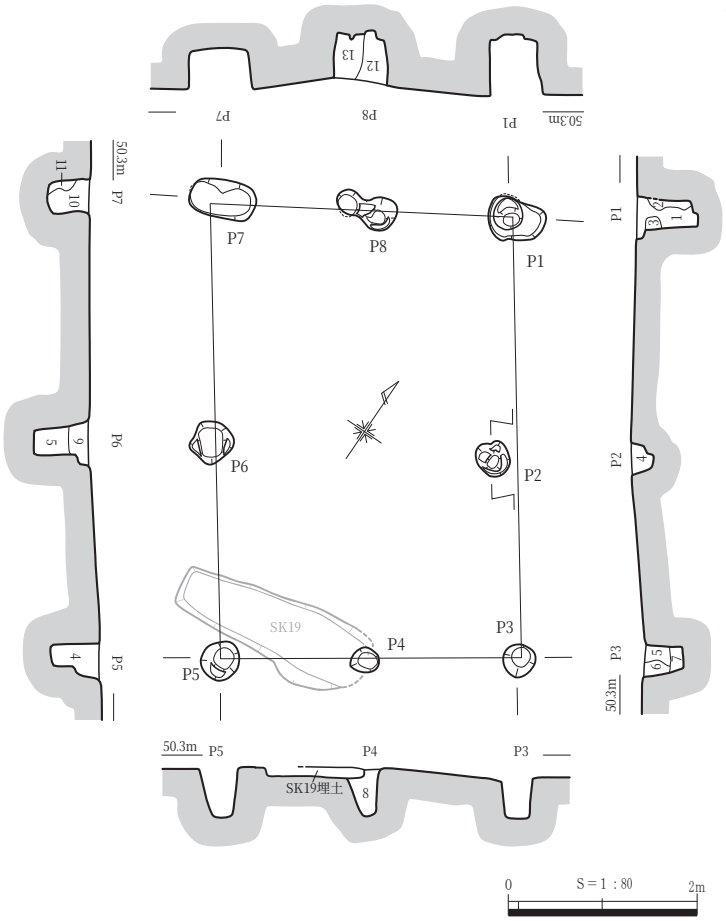
1　黒色土（10YR1.7/1）　φ1mm以下のロームブロック･細粒を多く含む
2　黒褐色土（10YR2/2）　φ1mm～1cmのロームブロックをやや密に含む
3　黒色土（10YR2/1）　φ1mm～1cmのロームブロックを密に含む
4　黒色土（10YR1.7/1）　φ1～2mmのロームブロックをやや密に含む
5　黒色土（10YR1.7/1）　φ1mm～1cmのロームブロックを密に含む

第69図　SB７

柱間距離はＰ１－Ｐ２間から順に2.5m、2.1m、1.6m、1.5m、2.3m、2.6m、1.5m、1.7mを測る。

Ｐ１・３・６・７埋土中から弥生土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

出土遺物及び周辺の遺構の様子から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉ごろと考えられる。



1　褐灰色土（10YR4/1）　黒褐色土ブロック･黄褐色ローム粒混じり
2　灰黄褐色土（10YR4/2）　黄褐色ロームブロック含む
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　黄褐色ロームに暗褐色土混じり
4　黒褐色土（10YR3/1）
5　黒褐色土（10YR3/1）　黄褐色ロームブロックを含む
6　黒褐色土（10YR3/2）　黄褐色ロームブロックを含む
7　黒褐色土（10YR2/3）　シルト質
8　黒褐色土（10YR2/2）
9　暗褐色土（10YR3/3）　黄褐色ロームブロック･ホーキブロックを多量に含む
10　暗褐色土（10YR3/4）　灰白色ホーキブロックを多量に含む
11　黒褐色土（10YR3/2）　灰白色ホーキブロックを含む
12　暗褐色土（10YR3/4）　灰白色ホーキブロックを含む
13　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　黄褐色ロームブロックを含む

第70図　SB８

SB９（第71図、表19、PL.27）

１区北西隅のＢ７グリッド北西隅にあり、標高57.5m付近の上部平坦面に位置する。梨畑に伴う造成のため、大きく削平を受けており、表土直下はソフトローム層がわずかに残るものの、大部分は上

のホーキ層となっていた。また、建物跡の北寄りを東西方向の暗渠が設けられていたほか、大部分は施肥溝等により撹乱されていた。建物跡の北側は調査区外となっているが、さらに北側まで延びるものと推定できる。

北東－南西方向に長い長方形を呈する掘立柱建物跡と考えられるが、先述の理由から、正確な規模は不明である。建物跡の南限は、Ｐ４とＰ５を結んだ短辺と考えられることから、桁行は３間(4.8 ～ 5.0m)以上となる。梁行は１間(3.4m)であるが、桁方向の柱穴間隔からみて、Ｐ４とＰ５の間に棟持柱穴が存在していた可能性がある。主軸はＮ－13 °－Ｗで、平面積は16.9㎡以上と中型となる。

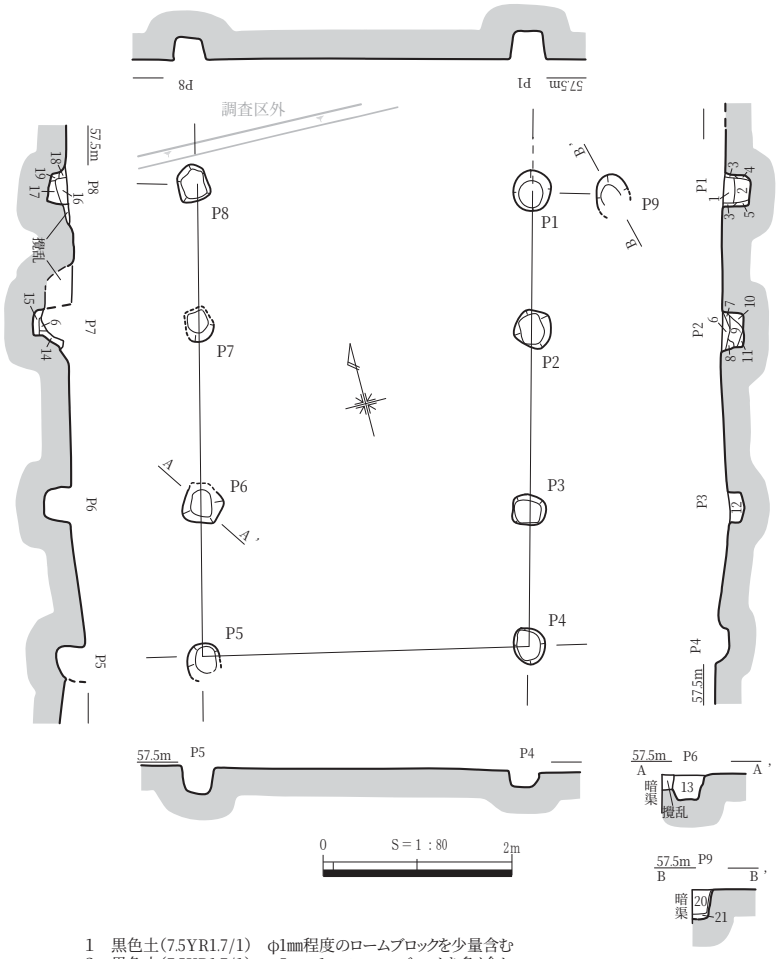
柱穴は、削平のため、Ｐ１が比較的残りがいいものの、その他は本来の規模が不明であり、現状で径32 ～ 40㎝程度、深さはＰ１が28㎝、その他は15 ～ 40㎝程度となる。Ｐ９は、長辺の東側軸線上より東側にずれているが、本建物跡とかかわる可能性がある。柱穴間距離は、Ｐ１からＰ４までの間が、それぞれ1.5m、1.9m、1.4mとなり、Ｐ５からＰ８までの間が、それぞれ1.6m、1.9m、1.5mとなる。また、南側の梁行の１間当たりは、約1.7mとなると推定できる。

埋土は、黒色土や黒褐色土を主体とし、ローム粒やロームブロックを含んでいる。Ｐ１の１層と２層が柱痕跡に相当すると考えられ、いずれもしまりが強く、粘性の弱い黒色土を呈する。この痕跡から推定される柱の直径は約26㎝であり、底面近くでやや細くなる。

遺物は、Ｐ１・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９

表18　SB８ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	61×47－67	
Ｐ２	39×36－23	
Ｐ３	35×33－43	
Ｐ４	30×28－46	
Ｐ５	43×39－50	
Ｐ６	47×45－61	
Ｐ７	69×40－56	
Ｐ８	64×36－64	



1　黒色土(7.5YR1.7/1)　φ1㎜程度のロームブロックを少量含む
2　黒色土(7.5YR1.7/1)　φ5㎜～1㎝のロームブロックを多く含む
3　極暗褐色土(7.5YR2/3)　細砂を多く含む
4　暗褐色土(7.5YR2/3)　クロボク･ローム･漸移層の混淆土
5　黒褐色土(7.5YR2/2)　細砂を少し含む
6　黒色土(10YR1.7/1)　φ1㎜程度のローム粒を多く含む
7　黒褐色土(10YR2/2)　φ1㎜未満のローム粒を少し含む
8　黒色土(10YR1.7/1)　粘性なし
9　黒色土(10YR1.7/1)　φ1㎜程度のローム粒を多く含む。粘性強
10　褐色土(10YR4/4)　クロボクとソフトロームの混淆土
11　黒色土(10YR2/1)　φ1㎜未満のローム粒をやや密に含む
12　黒色土(7.5YR2/1)　φ5㎝大のロームブロック、φ1～2㎜のローム粒、細砂、粗砂を密に含む
13　黒色土(10YR1.7/1)　φ5㎝のロームブロックを含む。φ1～2㎜のローム粒を多く含む
14　黒褐色土(10YR3/1)　φ1㎜未満のローム粒を多く含む。φ1㎝のロームブロックを含む
15　黄橙色土(10YR8/6)　ソフトロームとホーキブロックの混淆土
16　黒色土(10YR2/1)　φ1㎜未満のローム粒、細砂を多く含む。
17　黒色土(10YR2/1)　φ1㎜～1㎝のローム粒をやや密に含む
18　黒色土(10YR2/1)　φ1～2㎜のローム粒を多く含む
19　黒褐色土(10YR3/1)　φ1㎜のローム粒をやや密に含む。φ1㎝程度のロームブロックを含む
20　黒色土(10YR1.7/1)　細砂を多く含む
21　黒褐色土(2.5YR3/1)　ソフトロームとクロボク混淆土

第71図　SB９

の埋土中から土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

遺構の時期は、弥生時代中期と推定できる。

表19　SB９ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	44×40－28	柱痕跡有(径26cm)
Ｐ２	40×40－23	
Ｐ３	34×32－14	
Ｐ４	38×34－16	
Ｐ５	42△×36－32	
Ｐ６	46×44－28	
Ｐ７	38△×30△－42	
Ｐ８	40×34－24	
Ｐ９	42△×34－32	

SB10(第72・73図、表20、PL.27・53)

４区北側調査区際のＡ18・Ｂ18グリッドにあり、標高49.6 ～ 49.9m付近の下部平坦面に立地する。表土除去後のホーキ層及びソフトローム層で検出した。ピット群１内にあり、周辺は近現代の道路であるSX５によって削平され、硬化面となっていた。SB11と重複しているが、切り合い関係は不明である。

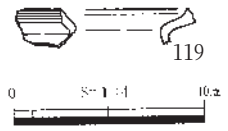
桁行３間(4.6 ～ 4.9m)、梁行１間(3.1 ～ 3.2m)の長尺の建物で、平面形は長方形を呈する。主軸はＮ－５ °－Ｅ、平面積は約16.7㎡と中型である。Ｐ１の半分以上は、調査区外に延びる。柱穴の規模は、径0.49 ～ 1.25m、深さ0.25 ～ 0.6mを測る。

柱間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に2.4m、2.3m、2.3m、2.4m、2.5m、2.1m、2.3m、2.5mを測る。Ｐ７埋土中から弥生土器甕119が出土している。

出土遺物から、本遺構の時期は清水編年Ⅲ－３様式、弥生時代中期中葉ごろと考えられる。

表20　SB10ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	50×25△－25	
Ｐ２	125×58－42	
Ｐ３	100×55－36	
Ｐ４	65×49－37	
Ｐ５	117×76－60	
Ｐ６	115×50－41	
Ｐ７	100×49－38	
Ｐ８	63×56－29	



第72図　SB10出土遺物

SB11(第73図、表21、PL.27)

４区北側調査区際のＡ18・Ｂ18グリッドにあり、標高49.6 ～ 49.9m付近のほぼ平坦面に立地する。表土除去後のホーキ層及びソフトローム層で検出した。ピット群１内にあり、周辺は近現代の道路であるSX５によって削平され、硬化面となっていた。SB11と重複しているが、切り合い関係は不明である。

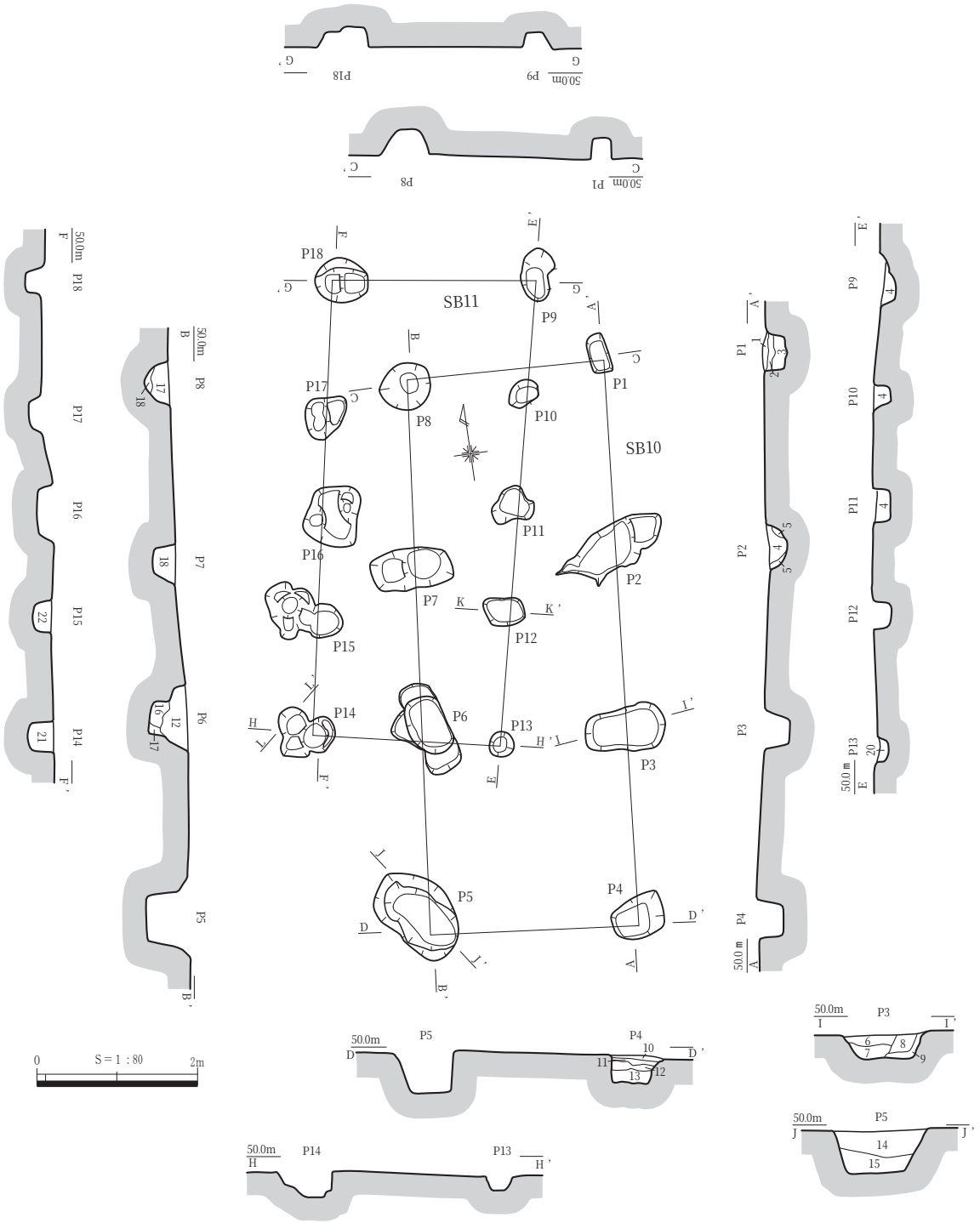
桁行４間(5.7m)、梁行１間(2.3m)の長尺の掘立柱建物跡で、平面は長方形を呈する。主軸はＮ－13 °－Ｅ、平面積は約12.9㎡と中型である。柱穴の規模は、径0.3 ～ 0.73m、深さ0.15 ～ 0.29mで、SB10に比べて小さい。

柱間距離は、Ｐ９－Ｐ10間から順に1.4m、1.4m、1.3m、1.6m、2.3m、1.5m、1.3m、1.2m、1.7m、2.3mを測る。

遺物は出土していないが、周辺の遺構の様子から、本遺構の時期は弥生時代中期中葉ごろと

表21　SB11ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ９	68×35－22	
Ｐ10	38×30－21	
Ｐ11	55×46－26	
Ｐ12	48×34－24	
Ｐ13	30×30－19	
Ｐ14	47×38－29	
Ｐ15	42×40－26	
Ｐ16	73×60－15	
Ｐ17	52×48－15	
Ｐ18	65×55－26	



1　暗褐色土(10YR3/3)
2　黒褐色土(10YR3/1)
3　黒褐色土(10YR2/2)　ホーキ粒をわずかに含む
4　黒色土(7.5YR2/1)　黄褐色粒子･ブロックを含む
5　黒褐色土(7.5YR2/2)　黄褐色粒子を多く含む
6　黒色土(7.5YR2/1)　黄褐色粒子を含む
7　黒褐色土(7.5YR2/2)　黄褐色粒子･ブロックを含む
8　黒色土(7.5YR2/1)　黄褐色粒子･ブロックを多く含む
9　黒褐色土(7.5YR2/2)　黄褐色粒子をかなり多く含む
10　黒褐色土(10YR2/2)　黄褐色ブロックを多く含む
11　黒褐色土(7.5YR2/2)
12　黒色土(7.5YR2/1)
13　黒色土(7.5YR2/1)　黄褐色ブロックを含む
14　黒褐色土(7.5YR2/2)　ホーキ粒を含む
15　暗褐色土(10YR3/3)　ホーキ粒を含む
16　黒褐色土(7.5YR2/2)　黄褐色ブロックを多く含む
17　黒褐色土(10YR2/2)
18　黒色土(10YR2/1)　地山ブロック･粒を含む
19　黒褐色土(7.5YR2/2)　黄褐色粒子を含む
20　黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒をわずかに含む
21　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック･粒を含む
22　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山ブロック･粒･粒子を含む
23　黒褐色土(10YR2/1)　ホーキ粒を少し含む
24　黒褐色土(10YR2/2)　ホーキ粒を少し含む

第73図　SB10・11

考えられる。

SB12（第74図、表22、PL.28）

３区北西調査区際のＢ15・Ｃ15グリッドにあり、標高49.5m付近の下部平坦面に立地する。表土除去後のソフトローム層で検出した。ピット群７内にあり、南側0.8mにはSK37が隣接する。周辺は、後世の農耕用トレンチャーによる攪乱が著しい。

桁行２間（3.6m）、梁行１間（2.4m）の掘立柱建物跡で、平面は長方形を呈す。主軸はＮ－15 °－W、平面積約8.6㎡と小型である。柱穴の規模は径0.32 ～ 0.47 m、深さ0.31 ～ 0.58mを測る。

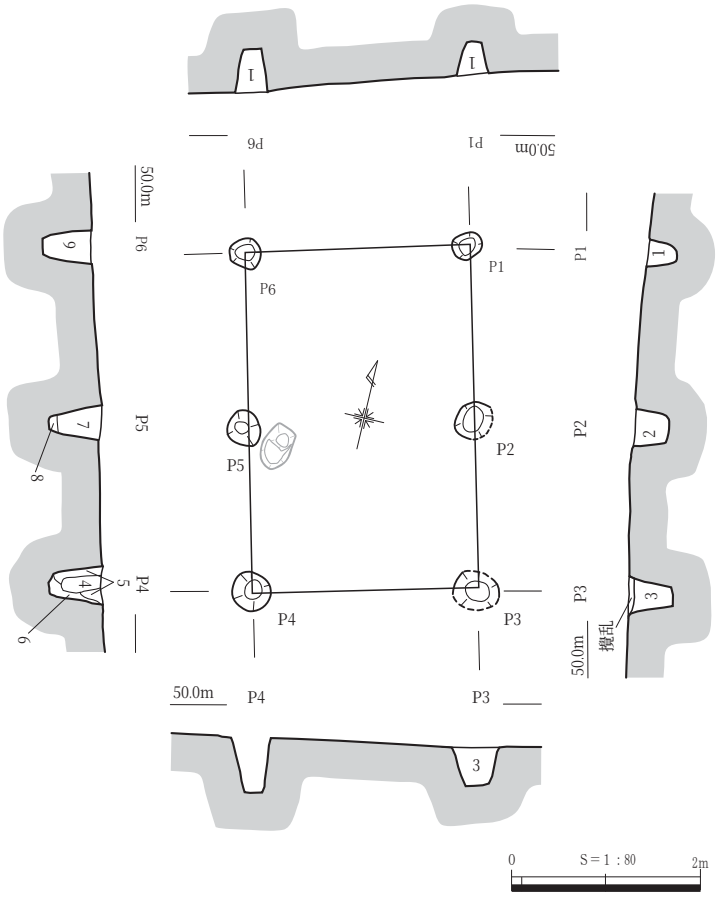
出土遺物は、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６から弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、柱穴埋土の状況、周辺の遺構配置などから、弥生時代中期頃のものと考えられる。

SB13・15（第75・76図、表23・24、PL.28・86）

５区中央南側調査区際のＩ３グリッドにあり、標高59.0m付近の上部平坦面に立地する。表土除去後のソフトローム層で重複関係にあるSB13・14・15の３基の掘立柱建物跡を検出した。SB13Ｐ２の土層断面の観察により、SB15の後にSB13が作られていたと判断した。SB14との前後関係は不明である。周辺は後世の耕作のトレンチャーによる攪乱が著しい。

SB13は、桁行１間以上（2.8 ～ 3.1m）、梁行１間（3.0m）の長尺の掘立柱建物跡となる可能性がある。平面は長方形を呈す。桁は南側調査区外へ延びるものと考えられる。主軸はＮ－16 °－W、平面積約10㎡以上を測る。柱穴の規模は径0.25 ～ 0.98m、深さ0.57 ～ 1.00mを測る。



1　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒多く含む
2　黒色土（10YR1.7/1）　ロームブロック少し含む。ローム粒多く含む
3　黒色土（10YR1.7/1）　ローム粒多く含む
4　黒色土（10YR2/1）　ローム粒多く含む
5　黒褐色土（10YR2/3）　ロームブロック・粒多く含む
6　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少し含む
7　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック少し含む。ローム粒かなり多く含む
8　黒色土（10YR1.7/1）　ロームブロック若干含む。たたきしめ硬くなったような層
9　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック若干含む。ローム粒かなり多く含む

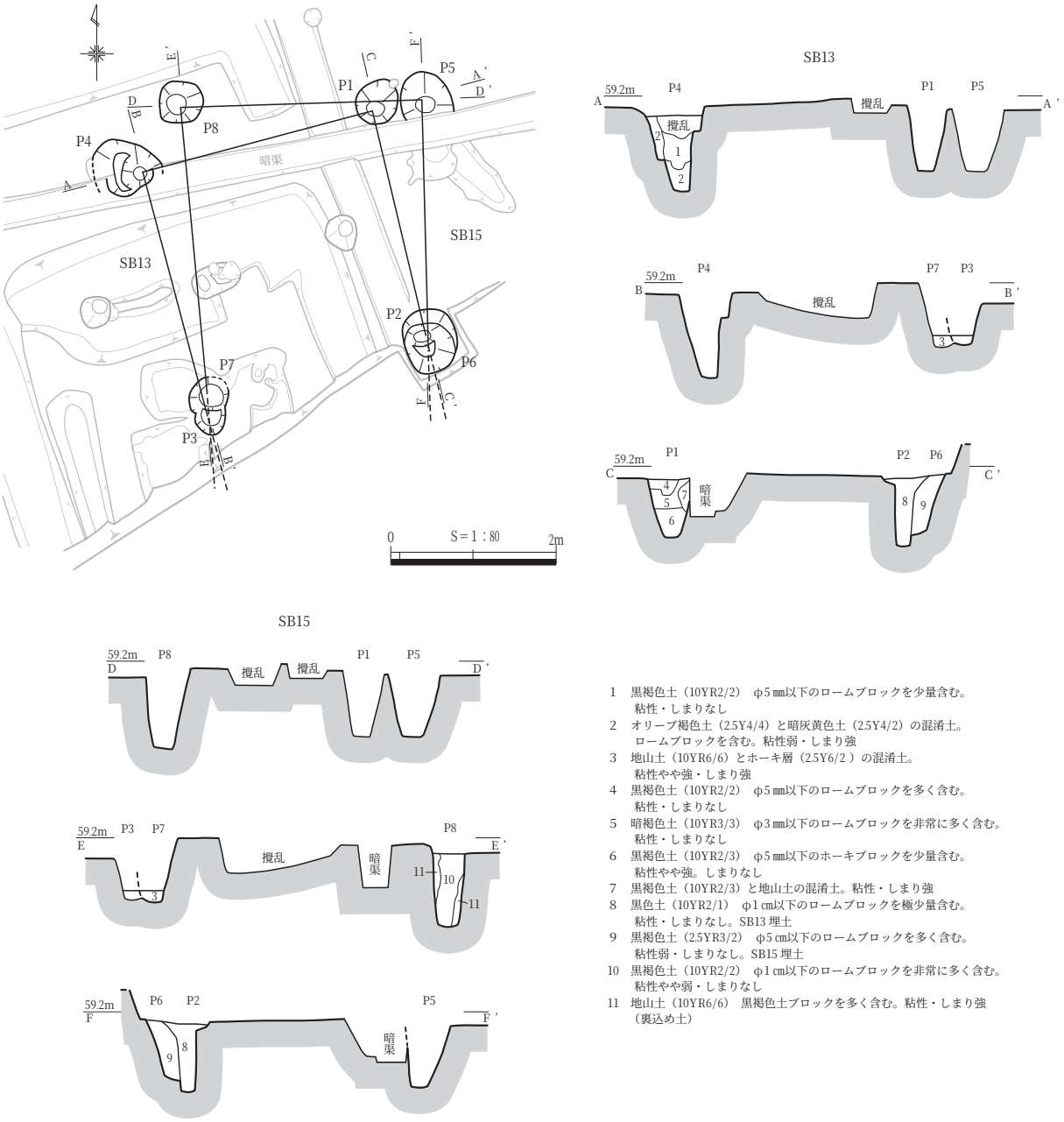
第74図　SB12

表22　SB12ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	36×32－31	
Ｐ２	44×36－38	
Ｐ３	47×42－46	
Ｐ４	42×40－58	柱痕径17cm
Ｐ５	40×35－56	
Ｐ６	34×34－52	

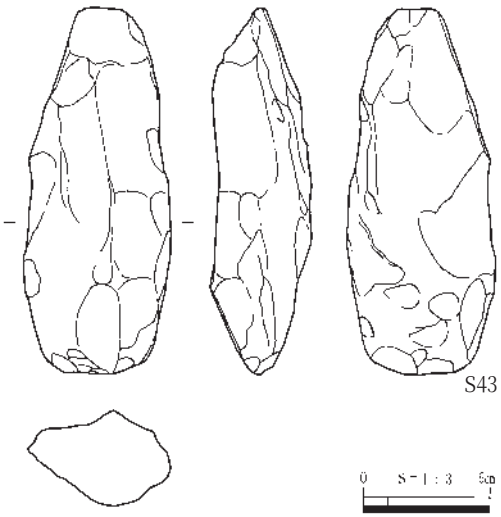
表23　SB13ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
P1	60×45－68	
P2	62×54－88	柱痕径18cm
P3	38×25－57	
P4	98×84－100	柱痕径22cm



1　黒褐色土（10YR2/2）　φ5㎜以下のロームブロックを少量含む。
　粘性・しまりなし
2　オリーブ褐色土（2.5Y4/4）と暗灰黄色土（2.5Y4/2）の混淆土。
　ロームブロックを含む。粘性弱・しまり強
3　地山土（10YR6/6）とホーキ層（2.5Y6/2 ）の混淆土。
　粘性やや強・しまり強
4　黒褐色土（10YR2/2）　φ5㎜以下のロームブロックを多く含む。
　粘性・しまりなし
5　暗褐色土（10YR3/3）　φ3㎜以下のロームブロックを非常に多く含む。
　粘性・しまりなし
6　黒褐色土（10YR2/3）　φ5㎜以下のホーキブロックを少量含む。
　粘性やや強。しまりなし
7　黒褐色土（10YR2/3）と地山土の混淆土。粘性・しまり強
8　黒色土（10YR2/1）　φ1㎝以下のロームブロックを極少量含む。
　粘性・しまりなし。SB13 埋土
9　黒褐色土（2.5YR3/2）　φ5㎝以下のロームブロックを多く含む。
　粘性弱・しまりなし。SB15 埋土
10　黒褐色土（10YR2/2）　φ1㎝以下のロームブロックを非常に多く含む。
　粘性やや弱・しまりなし
11　地山土（10YR6/6）　黒褐色土ブロックを多く含む。粘性・しまり強
　（裏込め土）

第75図　SB13・15



第76 図　SB13出土遺物

Ｐ２・Ｐ４で柱痕が検出され、復元柱径はそれぞれ約18cm、22cmである。

出土遺物は、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６から弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

SB15は、桁行１間以上(3.0 ～ 3.5m)、梁行１間(3.0m)の長尺の掘立柱建物跡となる可能性がある。平面は長方形を呈す。桁は南側調査区外へ延びるものと考えられる。主軸はN－１°－Wとほぼ南北方向で、平面積約11㎡以上を測る。柱穴の規模は径0.43 ～ 0.62m、深さ0.66 ～ 1.00mを測る。

SB13Ｐ１内から石斧未成品Ｓ43が出土している。

SB13、SB15とも詳細な時期は不明であるが、柱穴埋土の状況、周辺の遺構配置などから、弥生時代中期ごろのものと考えられる。

表24　SB15ピット一覧表

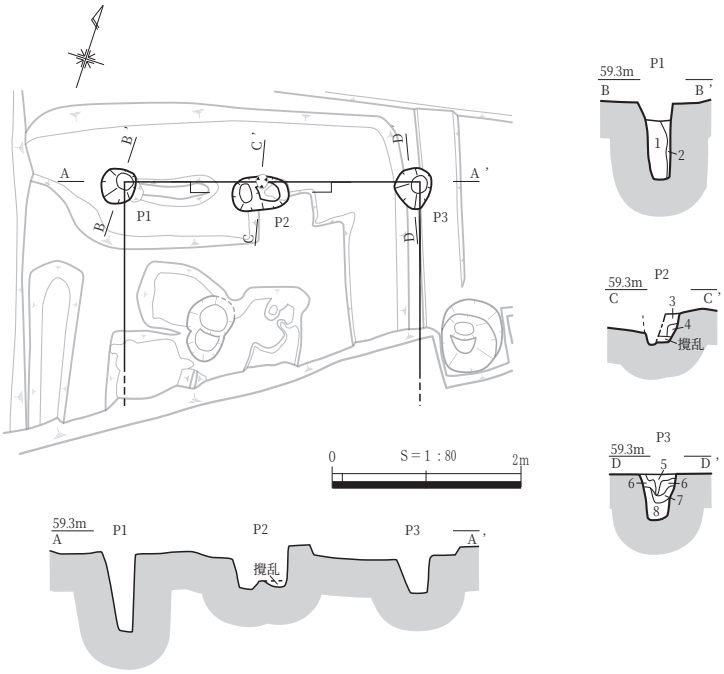
ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ５	60×54－71	
Ｐ６	62×54－66	
Ｐ７	46×43－100	
Ｐ８	46×45－99	

SB14(第77・78図、表25、PL.28・86)

５区中央南側調査区際のＩ３グリッドにあり、標高59.0m付近のほぼ平坦面に立地する。表土除去後のソフトローム層で重複関係にあるSB13・14・15の３基の掘立柱建物跡を検出した。SB13・15との前後関係は不明である。周辺は後世の耕作のトレンチャーによる攪乱が著しい。

大半は南側調査区へ延びるものと考えられ、桁行１間以上(1.2m以上)、梁行２間(3.6m)、平面が長方形を呈する掘立柱建物跡と推定できる。主軸はＮ－18°－W、平面積４㎡以上である。柱穴の規模は径0.25～0.41m、深さ0.27～0.82mを測る。Ｐ１で柱痕を検出し、推定できる柱径は約20cmである。

出土遺物には、分割施溝痕のある緑色凝灰岩の管玉素材Ｓ44がある。詳細な時期は不明であるが、埋土の状況、周辺の遺構配置などから、弥生時代中期ごろのものと考えられる。



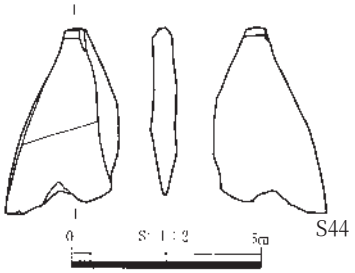
1　黒褐色土（10YR2/2）と暗灰黄色土（2.5Y4/2）の混淆土
　ローム粒を多く含む。
2　暗灰黄色土（2.5Y4/2）と明黄褐色ローム（10YR6/6）の混淆土。
3　オリーブ褐色土（2.5Y4/4）　粘性なし。硬くしまる
4　黒褐色土（10YR2/3）　1㎝以下のオリーブ褐色土（2.5Y4/4）ブロックを多く含む。
　粘性・しまり弱
5　褐色土（10YR3/3）と黒褐色土（10YR2/2）の混淆土
6　褐色土（10YR3/3）　砂質。φ１㎝以下のロームブロックを少量含む。粘性やや強。
7　オリーブ褐色土（2.5Y4/3）　φ1㎝以下のロームブロックを少量含む。粘性やや強。
8　暗褐色土（10YR3/4）　φ2㎝以下のロームブロックを多く含む。粘性やや強。

第77図　SB14

４　貯蔵穴

SK20(第79図、PL.29)

４区南東側のＦ17グリッドにあり、



第78図　SB14出土遺物

表25　SB14ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
P1	38×36－82	柱痕径20cm
P2	38×25－27	
P3	41×38－66	

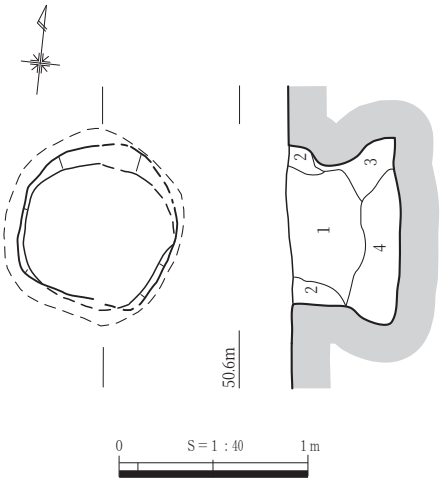
標高50.3m付近の下部平坦面に立地する。表土除去後のホーキ層で検出した。北東側約２mには、SB２・３がある。

平面はほぼ円形で、上縁部で長軸0.84m、短軸0.82mを測る。深さは0.56mを測り、断面はフラスコ状を呈す。底面もほぼ円形で、長軸1.05m、短軸0.94mを測る。底面はほぼ平坦である。

埋土は、４層に分層できた。ホーキ層粒を含む黒褐色土系の埋土が主体となっている。

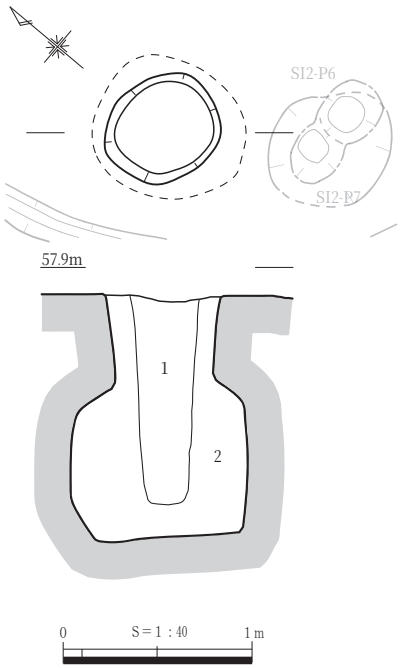
出土遺物には、埋土中から弥生土器片が出土しているが図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、出土遺物及び形態的特徴から弥生時代中期の貯蔵穴と考えられる。



1　黒褐色土(10YR2/2)　ホーキ粒含む
2　暗褐色土(10YR3/3)　ホーキ粒含む
3　黒褐色土(10YR3/4)　ホーキ粒含む
4　黒褐色土(10YR3/1)

第79図　SK20



1　黒褐色土（10YR2/3）　5～10㎜程のロームブロックを含む
2　暗褐色土とハードローム土の混淆土

第80図　SK29

SK29（第80図、PL.29）

１区北西寄り、Ｄ６・Ｄ７グリッド境界線上の北寄りにあり、標高57.7m付近の台地上平坦面に位置する。SI２内の南西隅付近の床面上において検出した。

平面形はほぼ円形を呈しており、径0.53～0.60m、深さ1.3mを測る。底面は長楕円形を呈しており、長径0.73m、短径0.64mを測る。断面は、中央がやや膨らむ形状で、最も膨らむ部分の平面は、長径0.82m、短径0.72mの長楕円形となる。形状からみて、貯蔵穴と考えられる。

埋土は、１層の黒褐色土と２層の暗褐色土からなり、いずれも粘性が強く、よくしまっていた。とくに２層は基盤層であるハードロームのブロックが密に混じっていた。

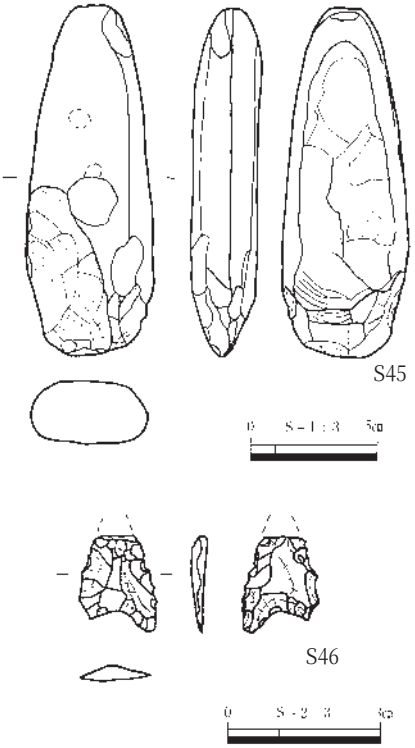
遺物は出土していないが、SI２に伴う遺構と考えられることから、遺構の時期は弥生時代中期後葉に位置づける。

５　土壙墓・木棺墓

SK９（第81・82図、PL.30・82・83）

４区中央のD18グリッドにあり、標高50.4m付近の下部平坦面に立地している。表土除去後のソフトローム層で検出した。南西側約２mにSK33がある。木の根による攪乱により、遺存状態は良好ではない。

二段掘りとなる土壙墓と考えられる。上縁部平面は、不整な長楕円形を呈し、長さ2.54m、幅1.75mを測り、深さ７～18cmに掘り下げた後、幅0.1～0.5mのテラスを設ける。下縁は長さ2.17m、幅0.4～0.7m（中軸で0.67m）を測り、深さ0.15～0.26mを測る。底面は長さ1.55m、幅0.32～0.49mを測る。南側の幅が北側より広くなっており、南側が頭位と考えられる。主軸方向は、N－９°－Wである。断面は、横断面形は逆台形状を呈し、縦断面形は



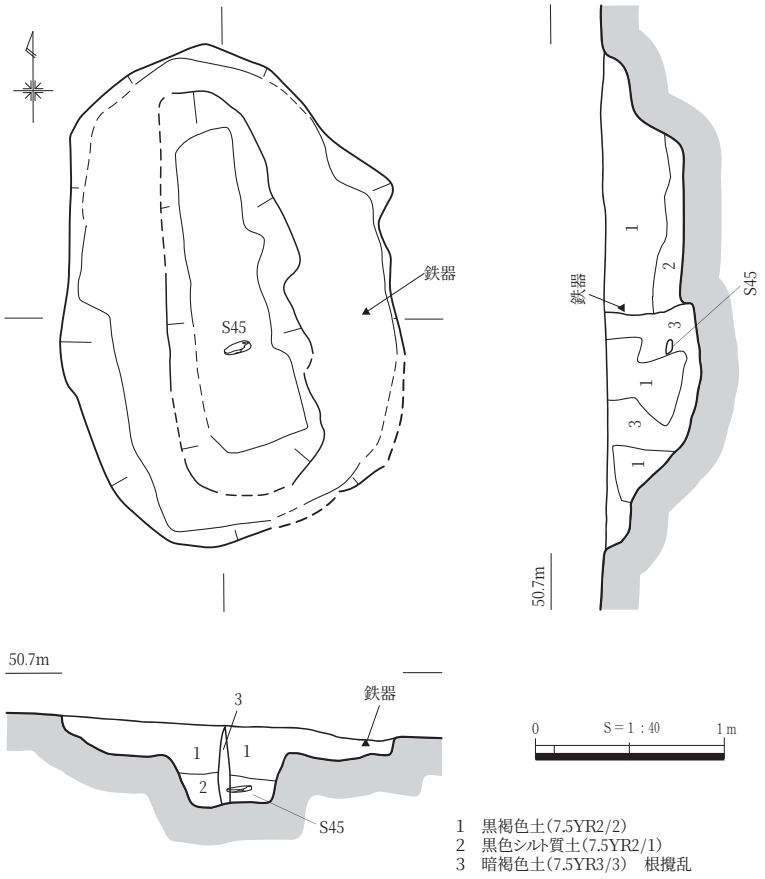
第81図　SK9出土遺物

南側がやや崩れた逆台形状を呈す。

埋土は、２層に分層できた。下層の黒色シルト質土は、よく締まる埋土である。木棺痕跡等はなかった。

遺物は、底面からやや浮いた状態で磨製石斧Ｓ45、テラス部埋土中で石鏃Ｓ46が出土している。

時期を示す良好な遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況等から弥生時代中期のものと考えられる。



第82図　SK９

SK19（第83図、PL.29）

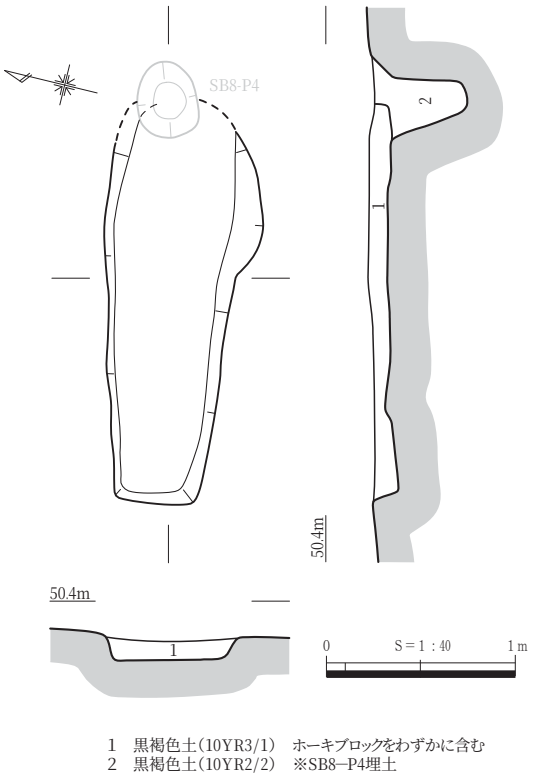
４区中央のD18・19グリッドにあり、標高50.4m付近の下部平坦面に立地している。クロボク層（４－Ⅳ層）を除去した後のソフトローム層で検出した。本来は、クロボク層から掘り込まれたものと考える。SB８のP4と重複しているが、切り合い関係から、SB８より新しいことが判明した。南東側約７mにSK９がある。

形態的な特徴から土壙墓と考えられ、平面は長楕円形を呈し、長さ2.1m、幅0.46～0.7（中軸で0.67m）、深さはわずかに0.08～0.14mを測る。底面は長さ2.05m、幅0.24～0.54mを測る。東側の幅が西側より広くなっており、東側が頭位と考えられる。主軸方向は、N－78°－Eである。断面は、横断面、縦断面とも逆台形状を呈す。

埋土は、ホーキ層粒を含み、よく締まる黒褐色土単層である。木棺痕跡等はなかった。SB８のＰ４の埋土を掘り込んでいることが確認された。

出土遺物には、埋土中から弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

時期を示す良好な遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況等から弥生時代中期のものと考えられる。



第83図　SK19

SK44（第84図、PL.30）

４区南側のF18グリッドにあり、標高50.3m付近の下部平坦面に立地している。周囲は町道によって削平され

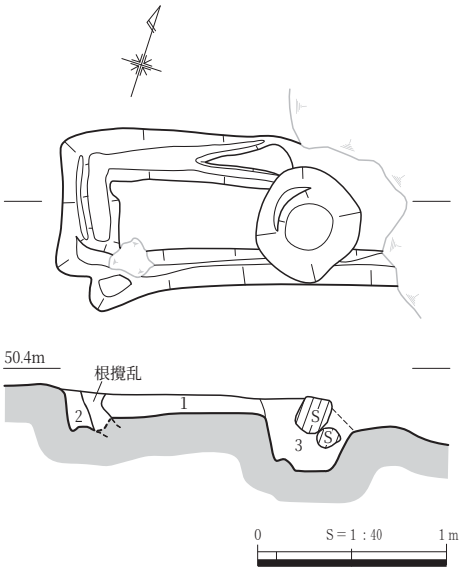
るとともに、近年の掘削及びピットによって大きく掘り込まれている。表土除去後のホーキ層で検出したが、本来はさらに高い位置から掘り込まれたものと考えられる。北西側約６mにはSK45がある。

東側が大きく掘削され消滅しており、全形を窺い知れないが、形態的特徴から木棺墓と考えられる。平面形は長方形を呈すものと推定され、長さ1.8m以上、幅0.84m、検出面から底面までの深さはわずかに４～14㎝を測る。壁際には、幅10～20㎝、深さ３～４㎝を測る溝が掘り込まれている。主軸方向は、N－72°－Eである。断面は、横断面は逆台形状を呈す。

埋土は、２層に分層でき、第２層は木棺痕跡の可能性がある。

出土遺物には、埋土中から弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

時期を示す良好な遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況等から弥生時代中期のものと考えられる。



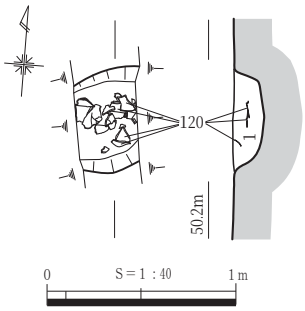
1　黒褐色土(10YR3/1)　ホーキ粒をわずかに含む
2　暗褐色土(10YR3/3)　シルト質。ホーキ粒を含む
3　黒色土(10YR2/1)

第84図　SK44

６　土坑

SK１(第85・86図、PL.30・54)

３区南西側のD15グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に立地する。表土除去後のホーキ層で検出した。北西側約５mにはSK14、北東側約４mにはSK35がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。



1　黒色土(7.5YR2/1)　ホーキ粒若干含む

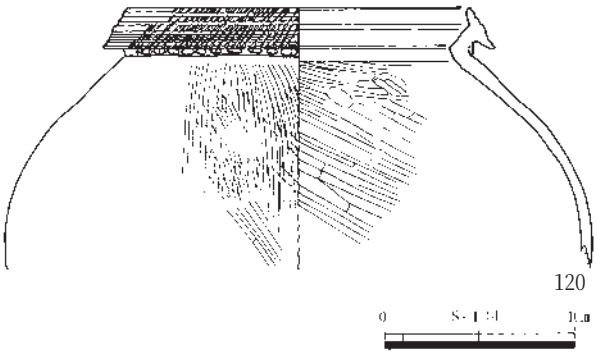
第85図　SK１

周辺はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削により東西が壊されているため、平面は明らかではない。長軸0.5m、短軸0.3m以上を測る。断面は浅い逆台形状を呈し、深さは0.14mである。

埋土は、黒色土単層である。

底面で弥生土器甕120が潰れたような状態で出土した。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。性格は不明である。



第86図　SK1出土遺物

SK２(第87・88図、PL.31・54)

１区北寄り、C４グリッドの北東隅にあり、標高57.0m付近の上部平坦面に位置する。後述する区画溝SD１より東側にあり、すぐ西側に隣接して落とし穴SK３が、東側には落とし穴SK７とSK11が

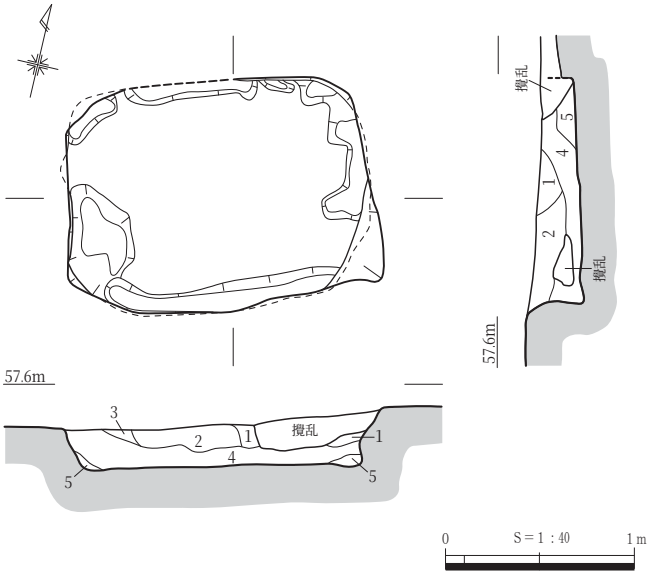
ある。表土直下のソフトローム層上面で検出した。梨畑の際の施肥溝によって、遺構の北側が壊され、埋土の一部が攪乱された状態であった。

平面はやや東西に長い隅丸長方形を呈し、長軸の長さ1.60m、短軸の長さ1.23m、深さ0.22～0.30mを測る。底面は、長軸の長さ1.60m、短軸の長さ1.23mである。また、底面の周囲には、深さ2～3㎝程度の浅い掘りくぼみがある。主軸はＮ－77°－Ｅであり、横断面はほぼ長方形を呈する。

埋土は黒色土または黒褐色土にローム粒を含むものを主体とする。また２層はしまりのやや強い暗褐色土で、焼土粒を含んでいる。

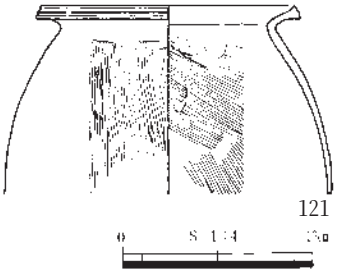
埋土上面および埋土中から、弥生土器の甕121が出土した。

出土土器は、清水編年Ⅳ－１様式に相当することから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。遺構の性格は不明である。



1　黒色土(10YR1.7/1)　ローム土が少し混じる
2　暗褐色土(10YR3/3)　φ1mm～1㎝のローム粒･ロームブロックを多く含む。焼土粒を少し含む
3　黒褐色土(10YR3/2)　φ1mm程度のローム粒を多く含む
4　黒色土(10YR1.7/1)　φ1mm程度のローム粒、細砂を多く含む
5　黒褐色土(10YR2/2)　φ1mm程度のローム粒をやや密に含む

第87図　SK２



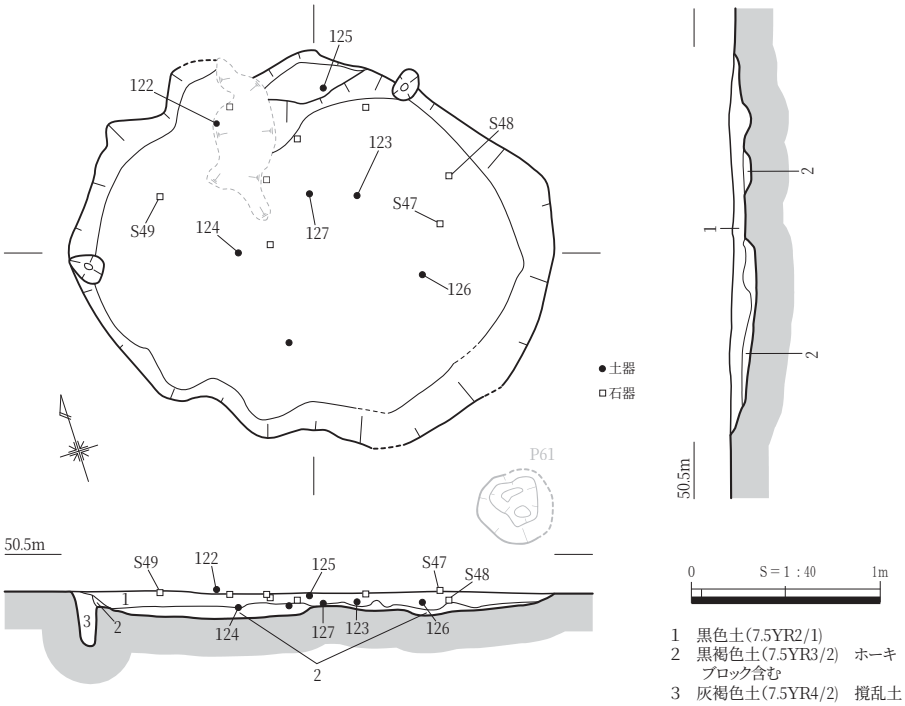
第88図　SK２出土遺物

SK５(第89・90図、PL.31・54・83～85)

２区南西側のG15グリッドにあり、標高50.2m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。南西側約８ｍにはSD３がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。

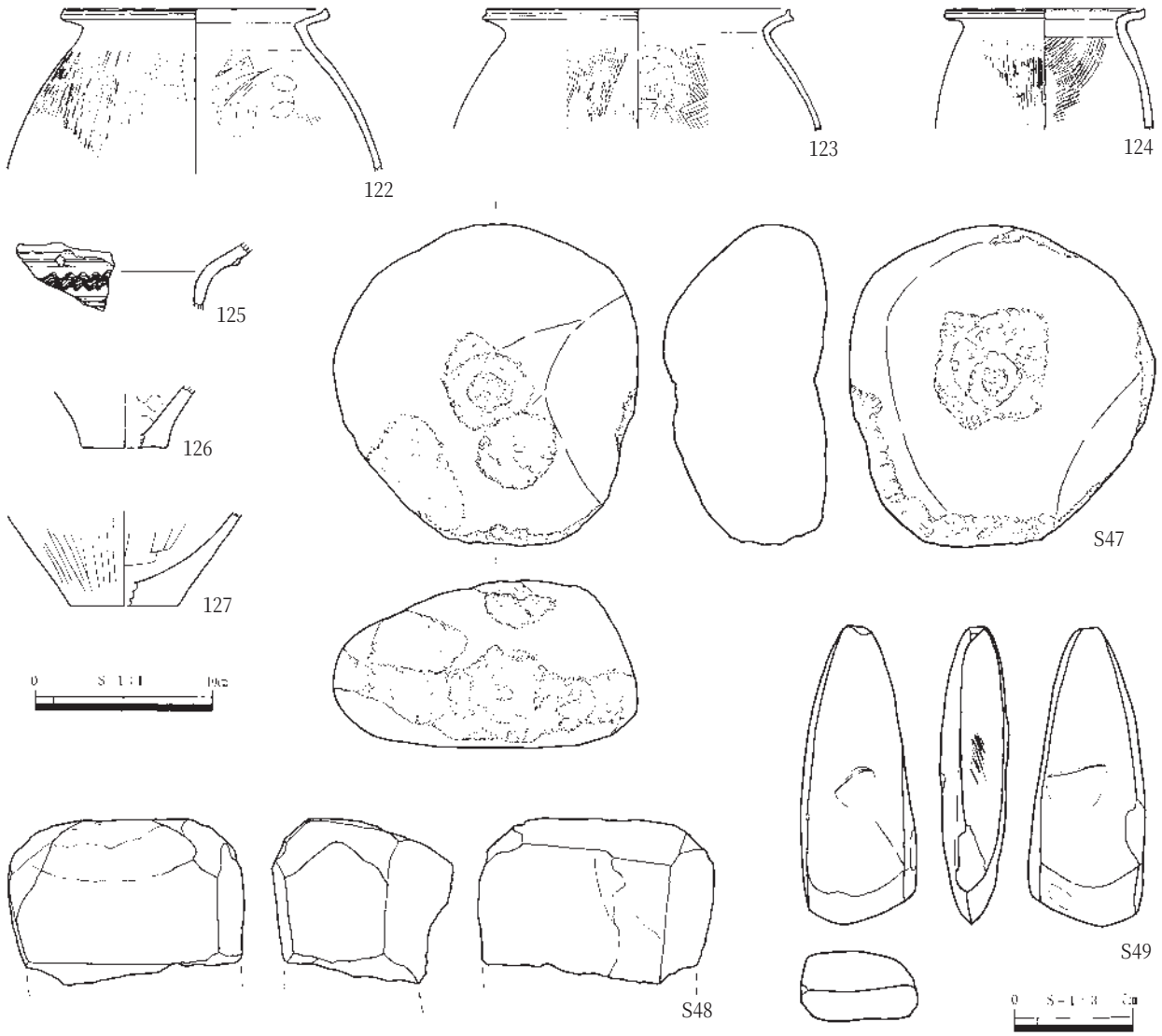
遺構の上半はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削が入っているため遺存状態は悪い。平面は不整な楕円形を呈し、長軸2.54m、短軸2.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは0.14mである。底面は一部凹凸があり、平坦ではない。

埋土は、黒色から黒褐色系の２層に分層でき

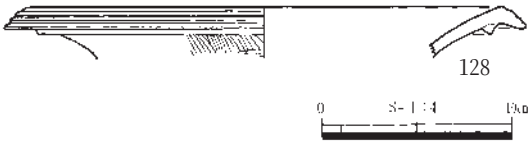


1　黒色土(7.5YR2/1)
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　ホーキブロック含む
3　灰褐色土(7.5YR4/2)　攪乱土

第89図　SK５



第90図　SK５出土遺物



第91図　SK６出土遺物

た。埋土上半は掘削されているため確かではないが、自然堆積したものと考えられる。

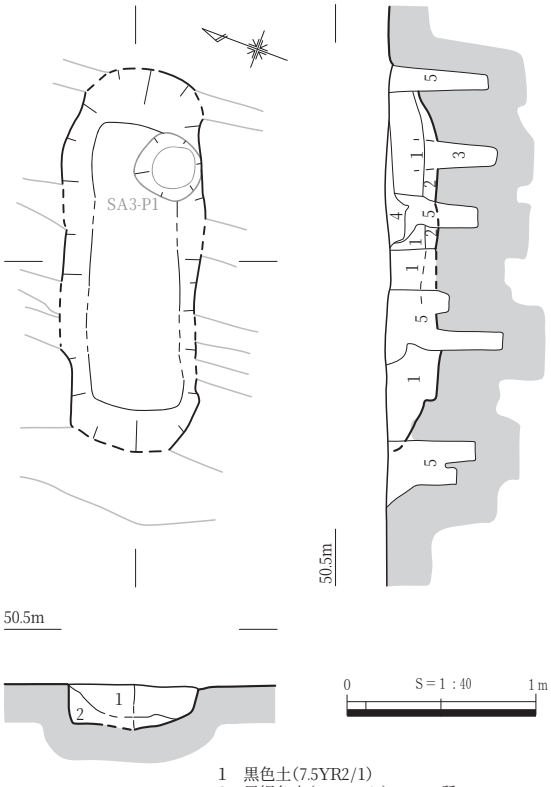
埋土中から弥生土器甕122～124・126・127、壺125、安山岩製敲石Ｓ47、細粒花崗岩製砥石Ｓ48、安山岩製磨製石斧Ｓ49が出土した。土器類は破片の状態で出土した。

出土遺物から、清水編年Ⅲ－３様式、弥生時代中期中葉のものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

SK６（第91・92図、PL.32・54）

２区西側のＥ15グリッドにあり、標高50.2m付近の下部平坦面に立地する。表土除去後のホーキ層で検出した。ピット群５内にあり、北東側約８ｍにはSK25がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。

周辺はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削が入っており遺存状態は悪い。平面形は長方形を呈し、長軸2.1m以上、短軸0.73mを測る。断面は皿状を呈し、深さは0.23mである。底面は



1　黒色土(7.5YR2/1)
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　シルト質
3　黒褐色土(7.5YR3/1)　SA3-P1埋土
4　暗褐色土(7.5YR3/3)　攪乱土
5　褐灰色土(7.5YR1/4)にホーキブロック含む。トレンチャー埋土(攪乱土)

第92図　SK６

たものと考えられる。

SK８(第93・94図、PL.32・54)

４区北東側のC16グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。南側約５mにはSK15がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。周辺はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削が入っており遺存状態は悪い。

平面は不整な長楕円形を呈し、長軸1.97m、短軸0.92mを測る。断面は皿状を呈し、深さは最大0.18mである。底面は平坦である。

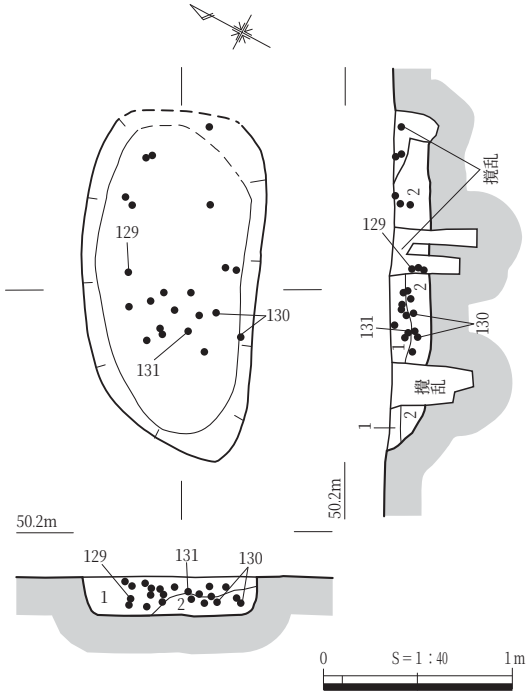
埋土は、黒褐色から極暗褐色土系の２層に分層できた。

一部凹凸があり、平坦ではない。底面東側でSA３Ｐ１を検出した。切り合い関係は明確ではないが、SK６の埋土を掘り込んだものと考える。

埋土は、黒色から黒褐色系の２層に分層できた。

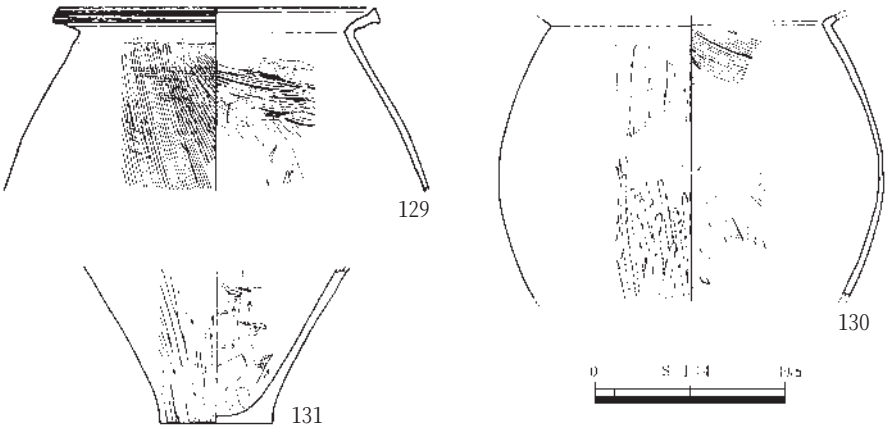
埋土中から弥生土器片が多数出土したが、図化できたものは壺128である。土器類は破片の状態で出土した。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用され



1　黒褐色土(7.5YR2/2)　炭化物若干含む。ホーキ粒少し含む
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)　ホーキ粒多く含む。2～3mmの地山ブロックを少し含む

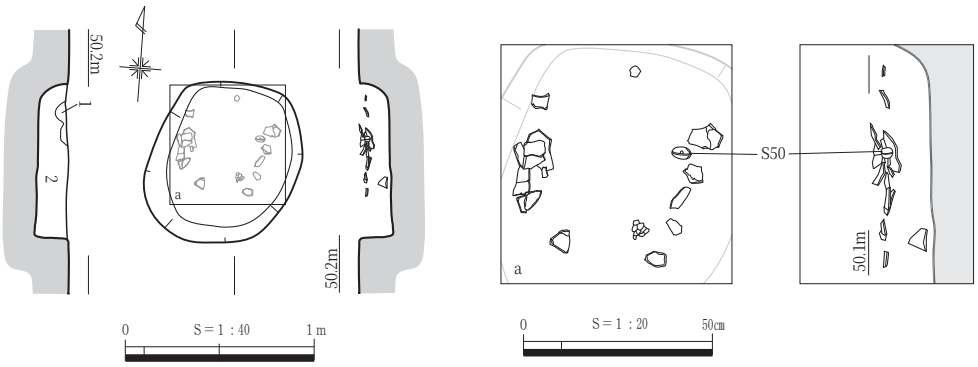
第93図　SK８



第94図　SK８出土遺物

埋土中で弥生土器甕129 ～ 131が出土した。土器類は破片の状態で出土した。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

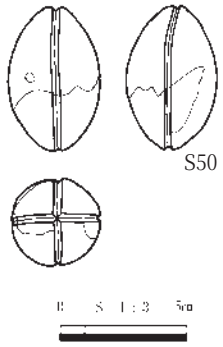


1　黒褐色土(7.5YR2/1)　ホーキ粒を含む
2　黒色土(7.5YR2/1)　地山粒を少し含む。ホーキ粒を含む

第95図　SK14

SK14(第95・96図、PL.32・83)

４区北東側のＣ16グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。北側約１ｍにはSK15がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。周辺はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削が入っており遺存状態は悪い。



第96図　SK14出土遺物

平面は楕円形を呈し、長軸0.95m、短軸0.76mを測る。断面は浅い台形状を呈し、深さは最大0.17mである。底面は平坦である。

埋土は、黒色から黒褐色系の２層に分層できた。

埋土中から弥生土器片が出土したが、図化できなかった。また、埋土中から北部九州型の有溝石錘Ｓ50が出土した。

詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

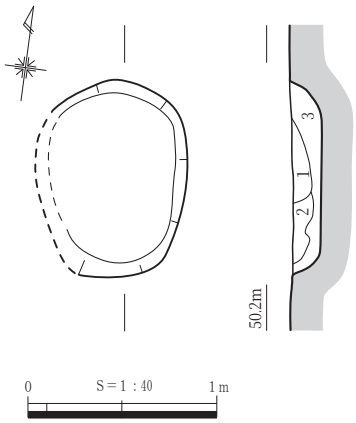
SK15(第97図、PL.32)

４区北東側のＣ16グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。南側約１ｍにはSK14がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。周辺はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削が入っており遺存状態は悪い。

平面は楕円形を呈すものと考えられ、長軸1.04m、短軸0.8mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは最大0.12mである。底面は平坦である。

埋土は、極暗褐色から黒褐色系の３層に分層できた。

埋土中から弥生土器片が出土したが、図化できなかった。



1　極暗褐色土(7.5YR2/3)　地山ブロック･粒を少し含む
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)　地山ブロック･粒･粒子を多く含む
3　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒を少し含む

第97図　SK15

詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

SK21（第98・99図、PL.32・55）

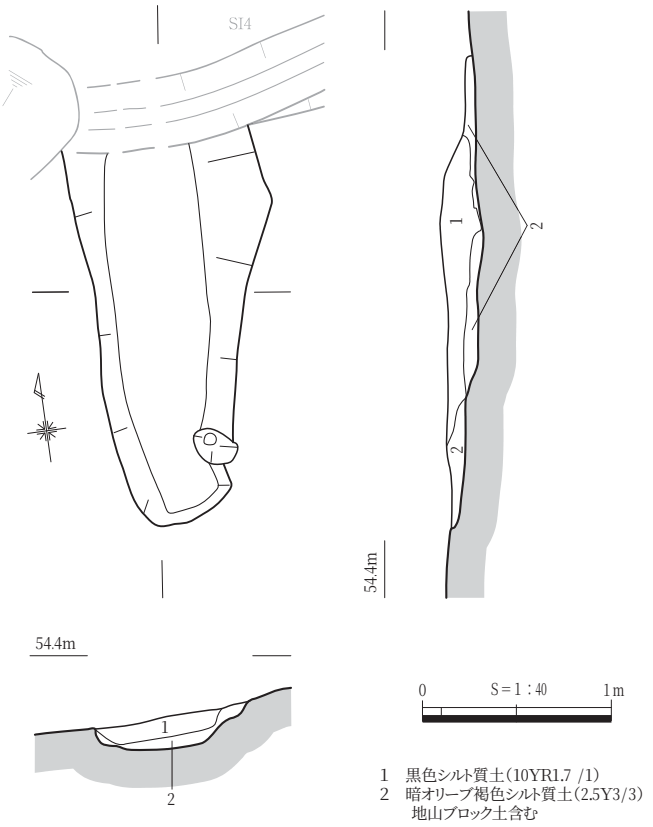
２区南東側のＧ10グリッドにあり、標高53.9～54.2m付近の斜面部に位置する。造成土を除去した後のソフトローム層で検出した。北側はSI４によって掘削されている。

SI４によって掘削されているため、全形は窺い知れないが、平面は長楕円形を呈すものと考えられ、長軸2.2m以上、短軸1.02mを測る。断面は皿状を呈し、深さは最大0.33mである。底面は平坦である。

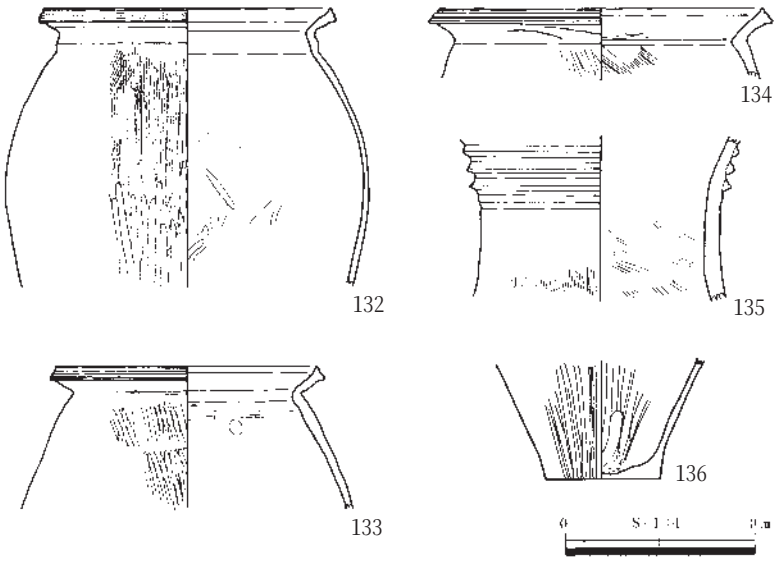
埋土は、黒褐色から暗オリーブ褐色の２層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から弥生土器片が多数出土したが、このうち甕132・133・135・136、壺134を図化した。いずれも、破片の状態で出土した。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。切り合い関係からもSI４に切られており、SI４より遡るものである。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。



第98図　SK21



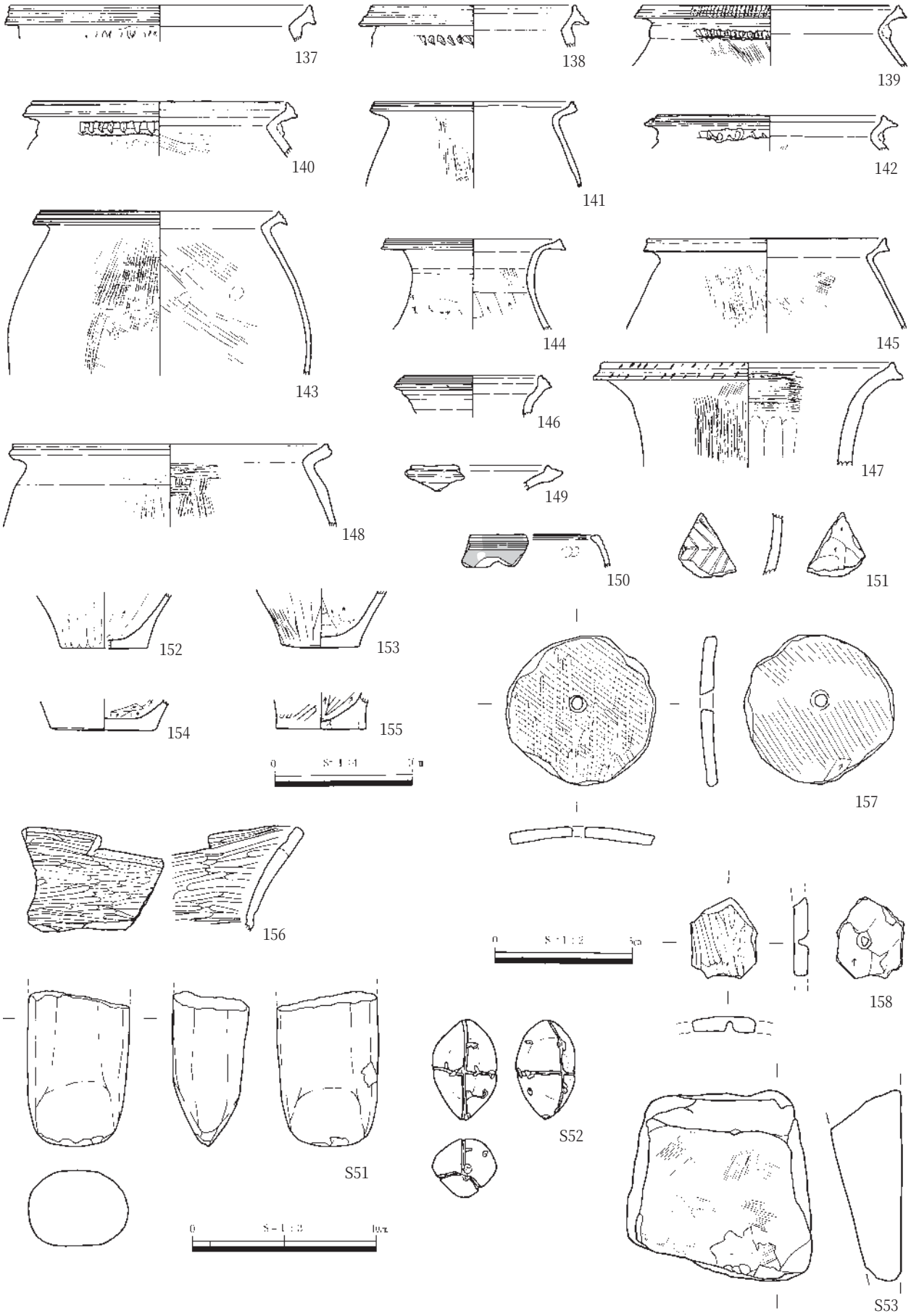
第99図　SK21出土遺物

SK22（第100・101図、PL.32・56・83・84）

２区中央やや北寄りのＥ13グリッドにあり、標高49.6m付近の谷部に位置する。旧耕作土を除去した後の谷堆積層であるＶ層で検出した。南東側約２mにはSK23がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.49m、短軸1.37mを測る。断面は、中位がやや膨らむがほぼ長方形を呈し、深さは最大1.11mと他の土坑に比べて深い。底面は平坦で、短軸方向の壁際に径14～16cm、深さ５cm程度の浅いピットが２基掘り込まれる。

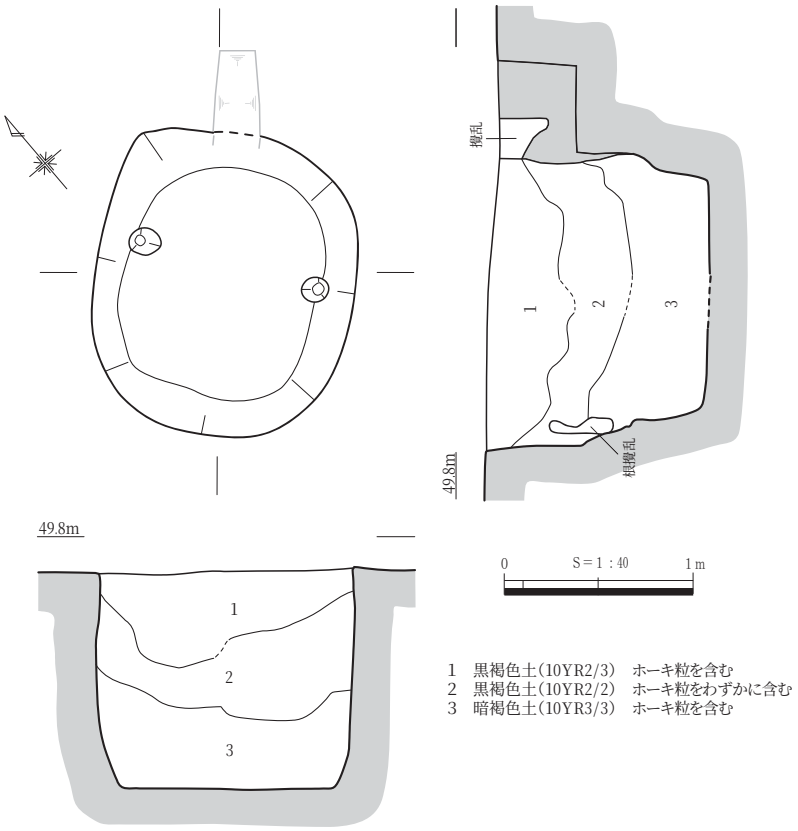
埋土は、ホーキ層粒を含む黒褐色から暗褐色土系の３層に分層できた。皿状に堆積していることか



第100図　SK22出土遺物

ら、自然堆積したものと考えられる。

埋土中全域に亘って多量の弥生土器が出土した。いずれも、破片の状態で出土した。図化したものは、埋土上層からは弥生土器甕139・141・145・148・152、壺144、高坏151が、埋土中層からは弥生土器甕137・138・140が、埋土下層からは弥生土器甕142・143・153 ～ 155、壺146・147・149、短頸壺150、縄文土器浅鉢156、土器転用紡錘車157、土器転用紡錘車未成品158、安山岩製太型蛤刃石斧Ｓ51、安山岩製有溝石錘Ｓ52、安山岩製大型石包丁片Ｓ53がある。



第101図　SK22

156は縄文時代晩期のもので、混入品である。

埋土下層出土遺物は清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられるが、埋土上層の遺物は概ね清水編年Ⅳ－３様式ごろのものと考えられ、遺構の時期を示すものと考える。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

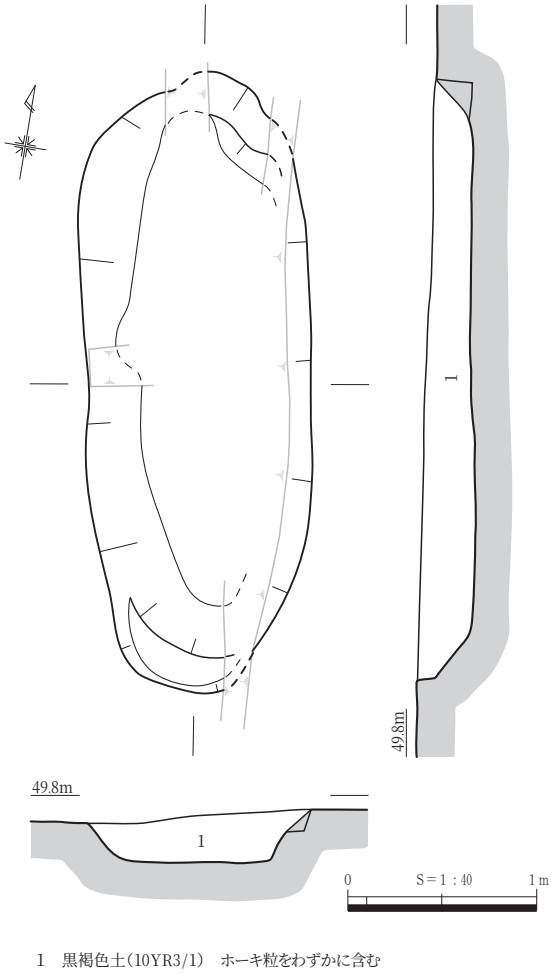
SK23（第102・103図、PL.33・59）

２区中央やや北寄りのＥ13グリッドにあり、標高49.7m付近の谷部に位置する。旧耕作土を除去した後の谷堆積層であるＶ層で検出した。北西側約２mにはSK22がある。

平面は長楕円形を呈し、長軸2.5m、短軸1.17mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.3mである。底面は平坦である。

埋土は、ホーキ層粒を含む黒褐色土単層である。

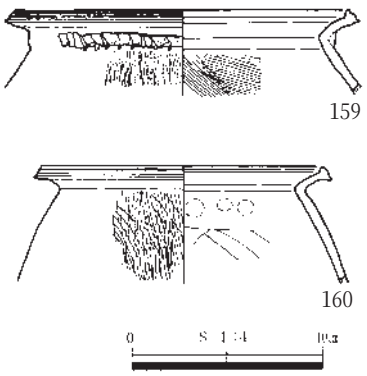
埋土中から弥生土器甕159・160が出土した。いずれ



第102図　SK23

も、破片の状態で出土した。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。



第103図　SK23出土遺物

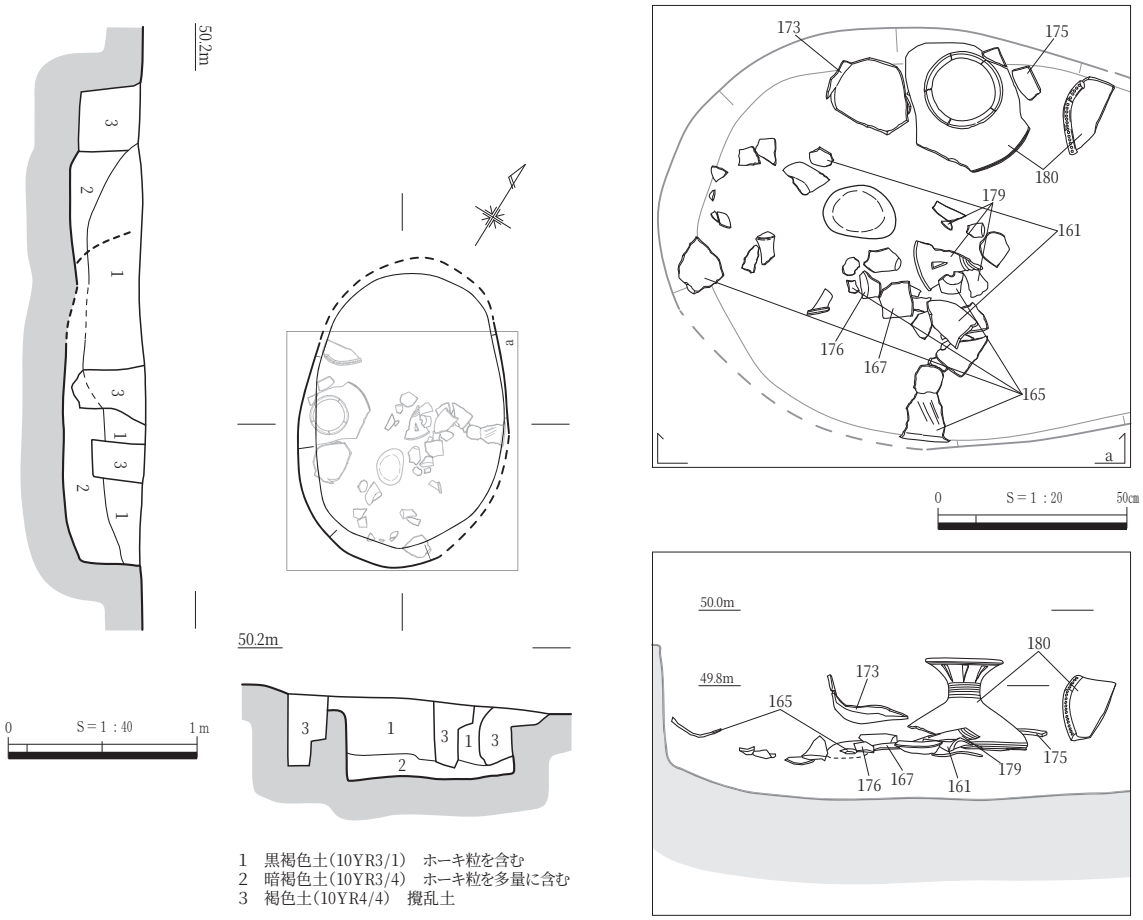
SK25（第104 ～ 106図、PL.33・57・58、巻頭図版２）

２区北西側のD14グリッドにあり、標高49.9m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。南西側約８mにはSK６がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しい。周辺はホーキ層まで掘削が及び、またトレンチャーの掘削が入っているため遺存状態は悪い。

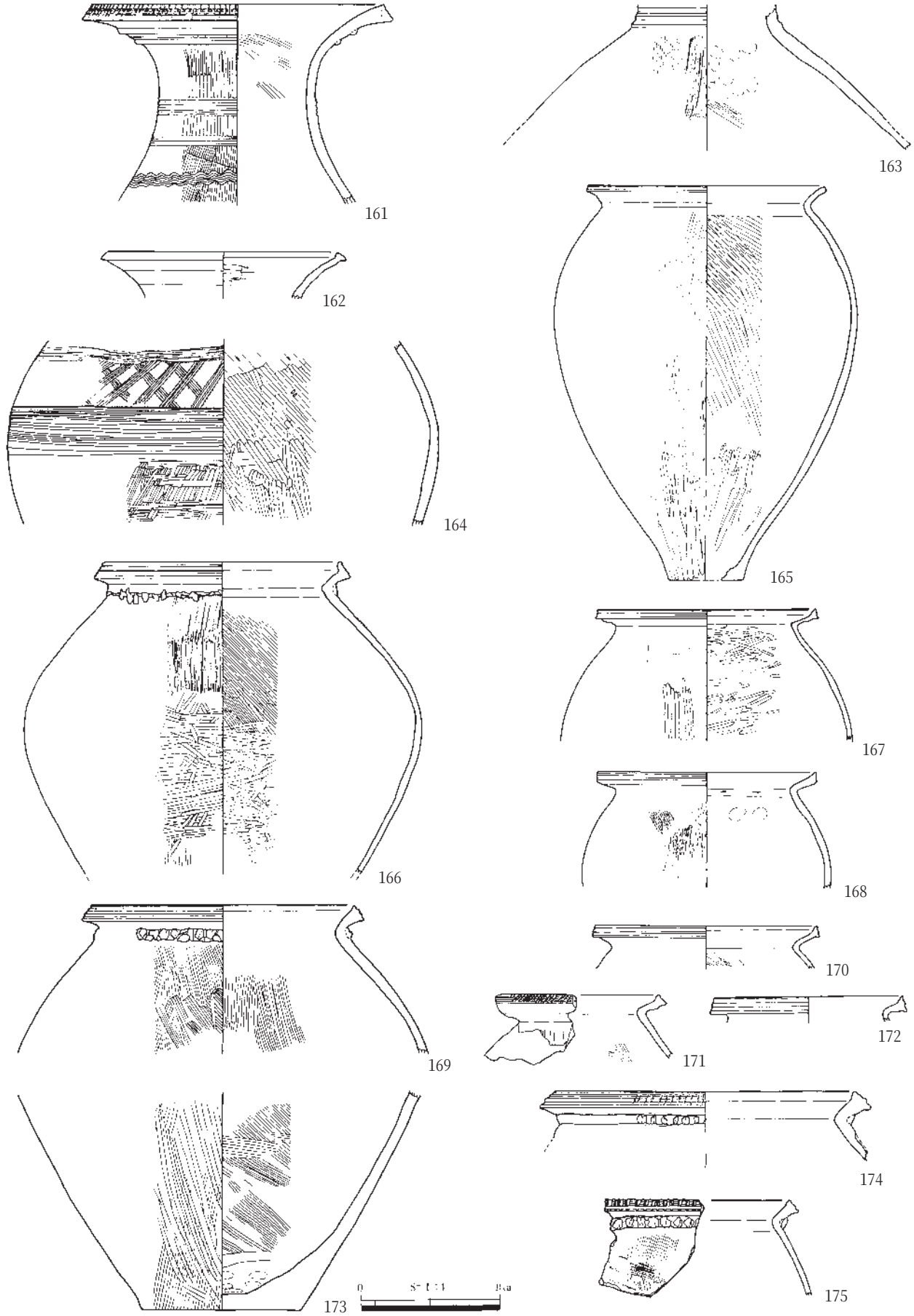
平面は楕円形を呈し、長軸1.6m以上、短軸1.07mを測る。断面は長方形を呈し、深さは最大0.3mである。底面は平坦である。

埋土は、ホーキ層粒を含む黒褐色から暗褐色土の２層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

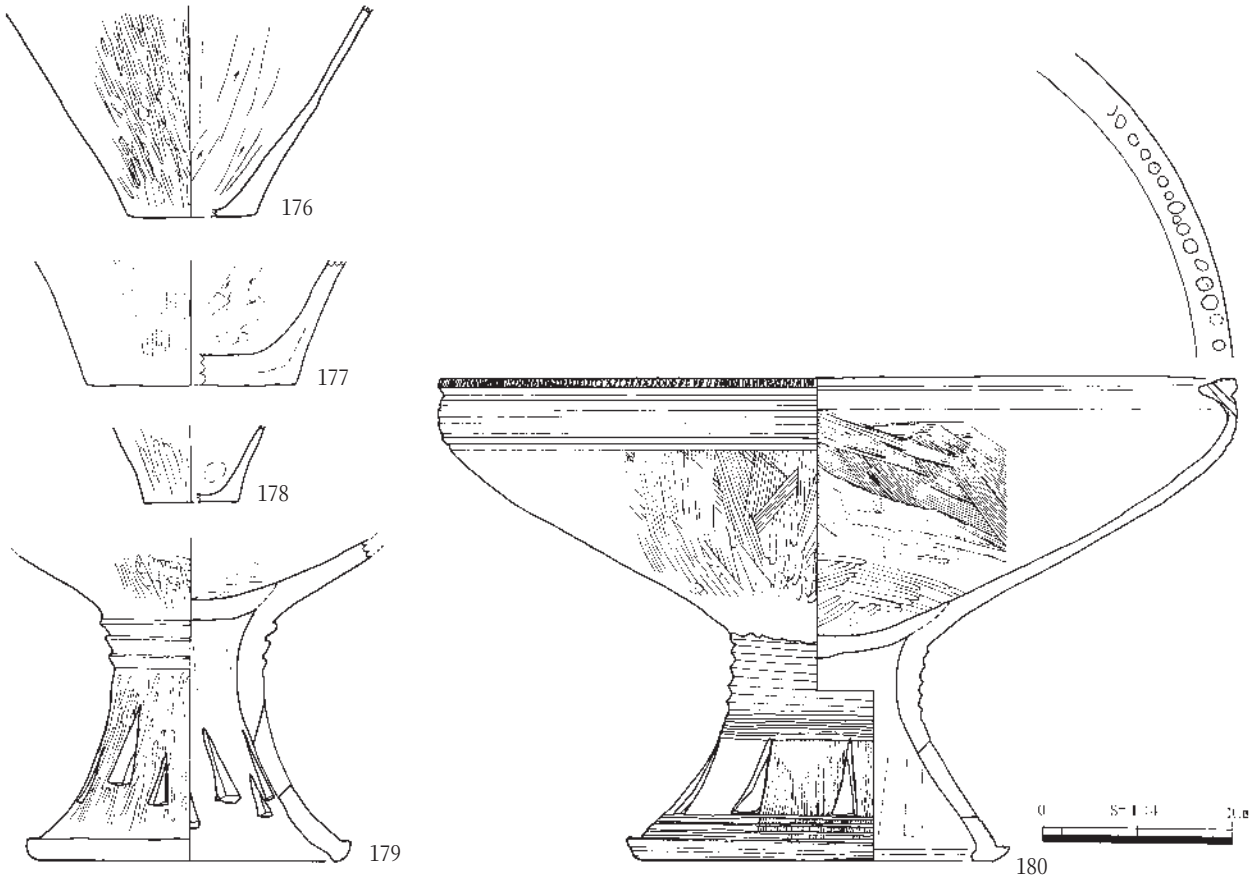
底面から埋土中にかけてまとまって弥生土器が出土し、壺161 ～ 164、甕165 ～ 178、高坏179・180を図化した。大半のものは破片の状態で出土したが、高坏180は一部破損していたが、ほぼ完形のま



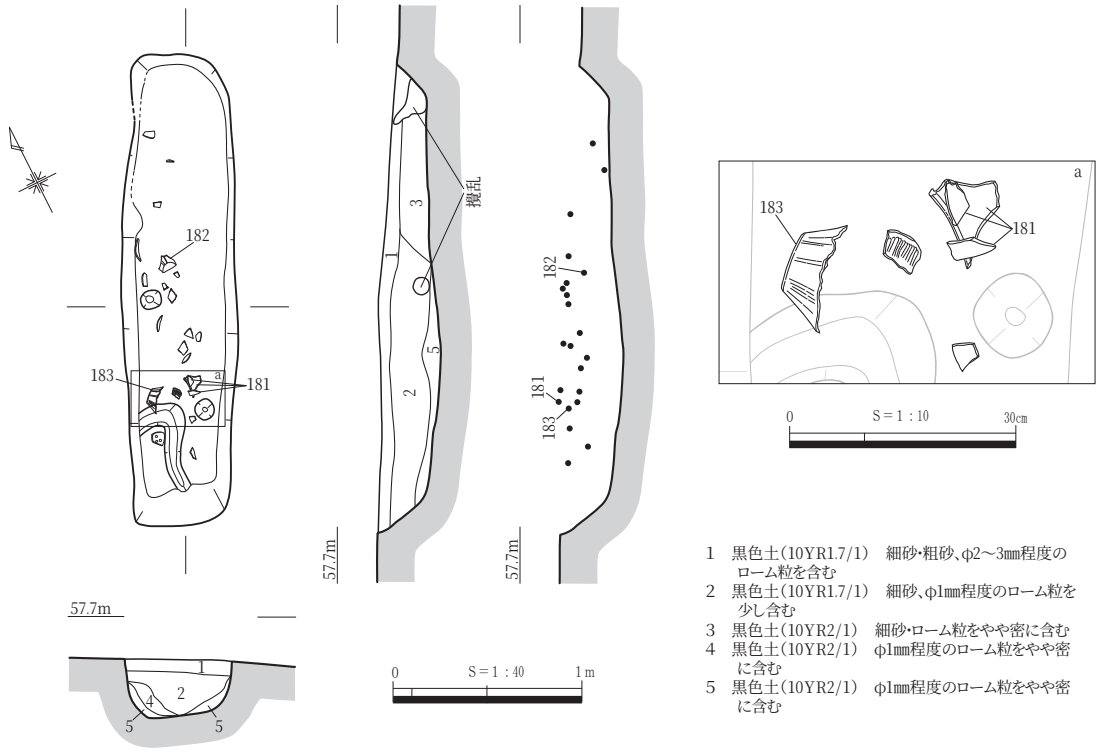
第104図　SK25



第105図　SK25出土遺物(1)



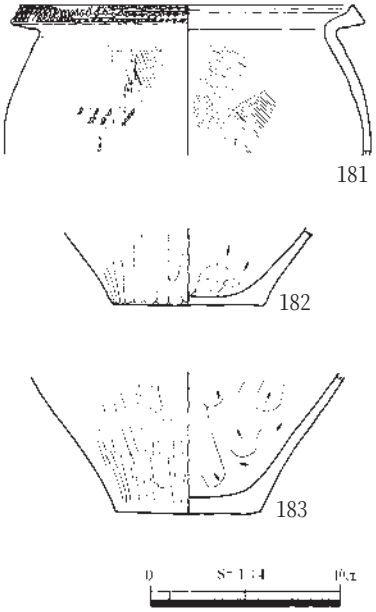
第106図　SK25出土遺物(2)



第107図　SK27

ま倒立状態で出土した。型式的には壺161・162、甕165は清水編年Ⅲ－３様式であるが、その他のものは概ね清水編年Ⅳ－１様式ごろのものと考えられ、型式的に時間差があるものが同時に出土していることになる。特に甕165は混入したものとは考えにくく、共伴関係を考えるうえで再考が求められるものであろう。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。なお、埋土中出土の炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で2,140±20BP（IAAA－103151）の年代値を得た。ほぼ土器型式と符合する値であると考える。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。



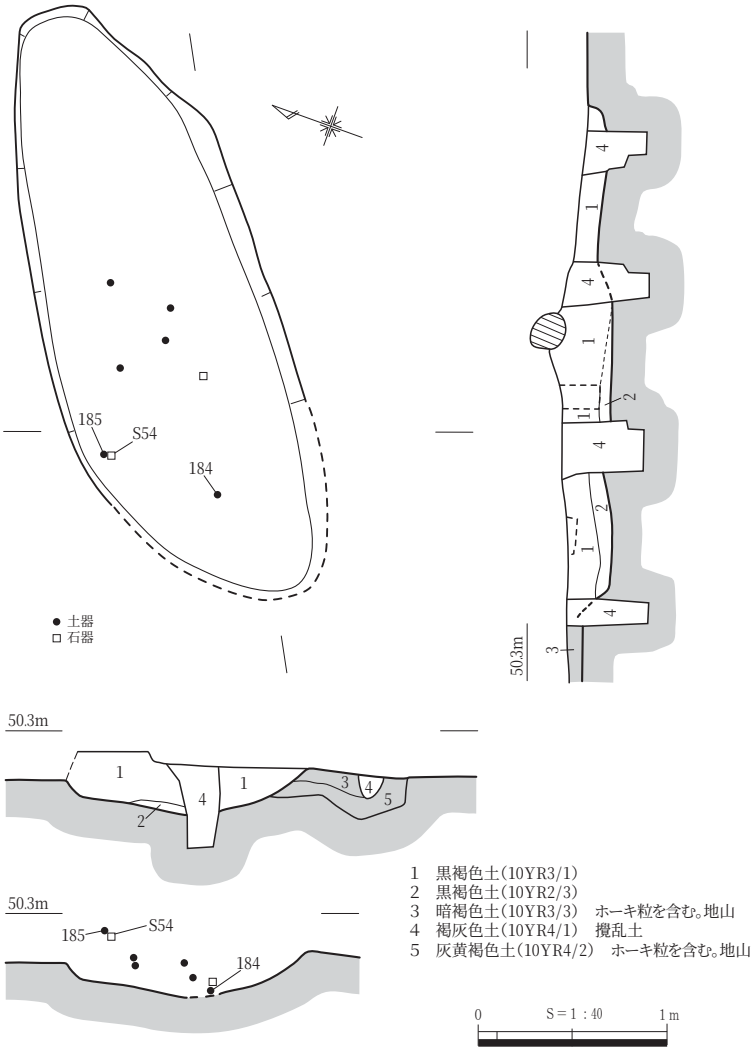
第108図　SK27出土遺物

SK27（第107・108図、PL.34・59）

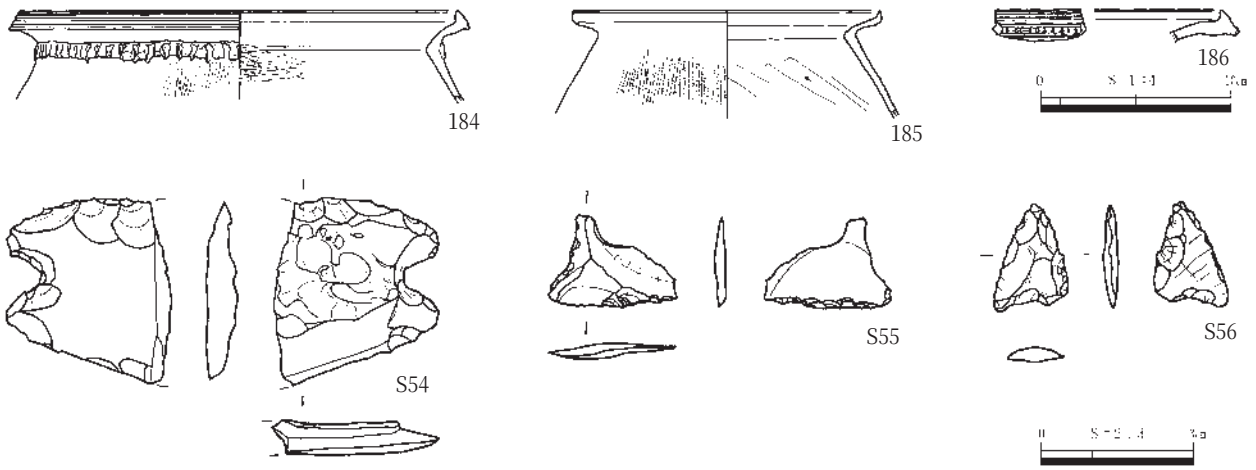
１区中央より東寄り、Ｄ３グリッドの南東隅にあり、標高57.5m付近で上部平坦面から東側の谷に向けて緩やかに傾斜する斜面上に位置する。溝SD１より８m程度東側にある。表土除去後の漸移層上面で検出した。平面は、北東－南西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸2.48m、短軸0.62mを測る。底面は深さ18～32㎝で、ソフトローム層に達しており、長軸2.20m、短軸0.46mを測る。主軸は、N－26°－Eであり、横断面は、平底の底面に向かって内湾しながら狭まる舟底状を呈している。

埋土は、しまり、粘性ともに弱い黒色土に地山ローム粒が含まれていた。埋土中からは、弥生土器片20点以上が出土した。181は甕で、182・183は甕底部片である。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉の廃棄土坑と考えられる。



第109図　SK28



第110図　SK28出土遺物

SK28（第109・110図、PL.34・59・82・85）

２区南西側のＦ14グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のソフトローム層からホーキ層で検出した。南西側約11mにはSK５がある。周辺は耕作に伴うトレンチャーの掘削が著しく、遺存状態は悪い。

平面は不整な長楕円形を呈し、長軸3.33m以上、短軸1.23mを測る。断面は不整な皿状を呈し、深さは最大0.16mである。底面は凹凸が著しい。

埋土は、黒褐色土系の２層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から弥生土器片、石器が破片状態で出土した。このうち、甕184・185、壺186、サヌカイト製打製石包丁片と考えられるＳ54、サヌカイト製石匙Ｓ55、サヌカイト製石鏃Ｓ56を図化した。

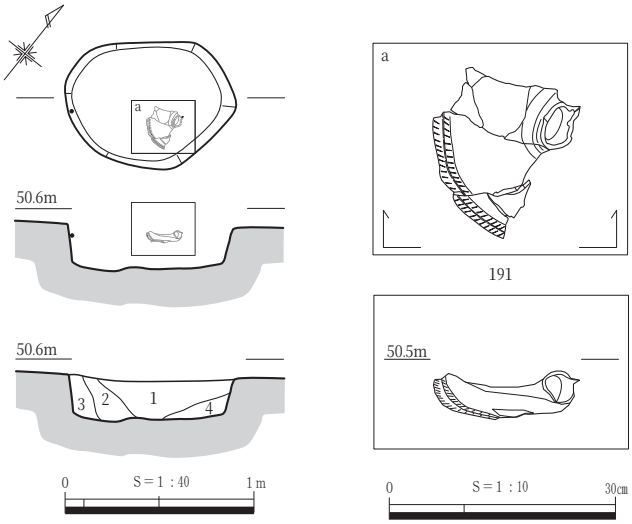
出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

SK30（第111・112図、PL.34・55・62・83）

４区中央のD18・E18グリッドにあり、標高50.5m付近の下部平坦面に位置する。弥生時代中期の遺物を包含するクロボク層（４－Ⅳ層）を除去した後の、ソフトローム層で検出したが、本来は、クロボク層中から掘り込まれたものと考える。西側約１mにはSI１、北側約１mにはSK33が隣接する。

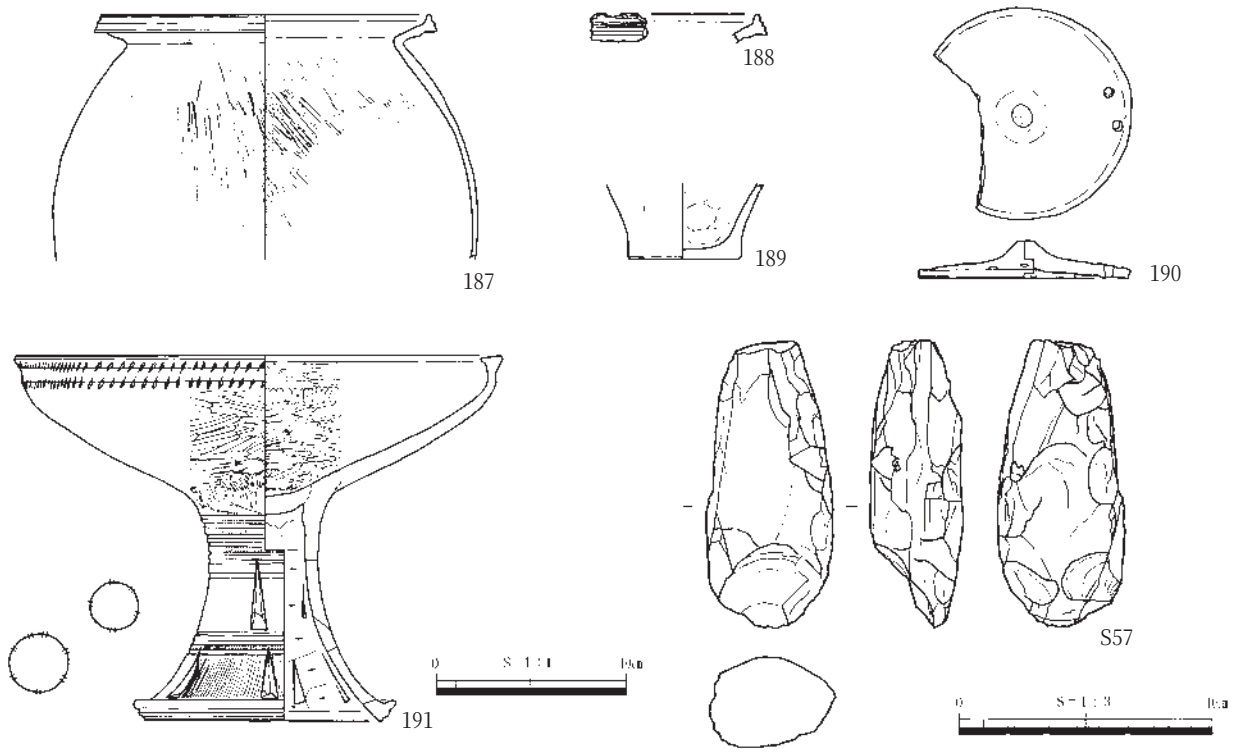
平面は楕円形を呈し、長軸0.89m、短軸0.66mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.22mである。底面は平坦である。

埋土は、暗褐色から黒褐色土系の４層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。



1　黒褐色土（10YR3/1）　ホーキ粒を含む
2　褐灰色土（10YR5/1）　ホーキ粒を多量に含む
3　褐灰色土（10YR4/1）　ホーキ粒を含む
4　暗褐色土（10YR3/3）　ホーキ粒わずかに含む

第111図　SK30



第112図　SK30出土遺物

埋土中から弥生土器甕187・188、甕底部189、蓋190、高坏191、サヌカイト製蛤刃石斧Ｓ57が出土した。土器類は、破片の状態で出土した。高坏190はSD２出土の口縁部片と同一個体と考えられる。

出土遺物から、清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の性格は不明であるが、遺物出土状況から、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

SK32（第113・114図　PL.34・60・62・86）

１区の南東隅付近、Ｇ２グリッドの北西隅にあり、標高58.0m付近の上部平坦面に位置する。すぐ東側には溝SD１が、７～８m程度西側には掘立柱建物跡SB６がある。表土直下のソフトローム層上面で検出した。梨畑の際の暗渠が東西方向に設けられ、遺構の北寄りが壊されるほか、遺構の北端も攪乱を受けていた。

平面は、ほぼ南北に長い隅丸長方形を呈し、中央付近がわずかに内湾する。規模は、長軸4.66m、短軸0.98m、深さ0.30mを測る。底面は、長軸4.22m、短軸0.78mである。主軸は、Ｎ－８°－Wで、横断面は逆台形状を呈している。

埋土は、しまりがやや強く、粘性が弱い黒色土に、地山ローム粒を含む３層に分層できた。埋土中からは、土器片80点以上のほか、碧玉石核１点が出土した。

192～196は甕、201～203は壺、197～200は甕の底部である。Ｓ58は碧玉石核で、第４章で後述する産地同定の結果、北陸・菩提産の可能性が指摘された。

出土土器は清水編年Ⅳ－２・３様式に相当することから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

遺構の性格は、遺物の出土状況から、廃棄土坑と考えられる。